

181号 今月の発信〈あごら東海〉



# 私の ライフワーク

- 突然の転身のなかで — 大脇雅子
- 江戸時代に生きた女たちをたずねて — 門 玲子
  - 文を書く怖れと歓びを — 皆森禮子
  - グループで本作り — 吉川富士子
- 「別姓」を「家」からみて — 小森ひとみ
- ミニコミ紙で起こしたい小さなアクション — 水野富美世
  - (連載)看護婦 光と影(3) — 増田れい子
  - 女から女たちへ — 新年エール交換





熱唱するサブリーンの歌手  
詳細はパレスチナ抵抗の音楽P. 51に  
写真提供・古居みずえ

## 突然の轉身のなかで

### 大脇雅子

弁護士として三十年、在野で法律にかかわって生きて来た私が、志のかたちを変えて、立法の場に身を置くことになった。轉身は突然に、状況と私の課題が重なりあって起きた。PKO協力法の成立は、平和を守る礎としての憲法の危機だと思った。女性労働の事件を手がけながら、機会均等法の限界を痛感していた。政策決定の場への女性の参加も少ない現状の中で、何とかしなければという想いが私をつき動かした。

国会議員になって五か月が過ぎたが、佐川疑惑でゆれる審議の空転のなかで、調査や集会への参加、抗議行動等、忙しい日を送っている。議員面会所前で、佐川疑惑徹底糾明やPL法早期制定等のデモや集会に参加した人たちの請願を受ける。私は、六〇年の安保闘争の時、国会議事堂を包囲したデモの中にあつて、国会活動に期待をかけながら、何度かこの「議面」に出かけた。立場を変えていま、請願を受ける側にいる。連帯のシュプレヒコールをし、激励を受けながら、複雑な想いにかられる。この儀式の構図から私は何をどのように生み出せばよいのかと。請願の人たちの痛いほどの想いが心に響く。

私にとって、人生を生きることは、自律する志を心棒に、自分にあくまで正直に、誠実に生きることである。どんなに悩んでも、どんなに足ぶみしているときでも、そしてもう駄目だとあきらめて思い切ったときでも、どこからとなく自分をつき動かすもの。横道にそれでも引き戻される内なる力。それは、かっこよくいえば、自律してやまない志。ありていに言えば頑固さ、執念、未練。誰でも、かすかな希望とともに、そんな内なる声を何度か聞いたことがあると思う。

いままでの理想の生き方は、パターン化されていた。古くいえば良妻賢母。新しい時代でも女性らしい仕事。パートタイマーとして仕事と家事育児の両立等。しかし、いまの時代は女たちに、主体として内なる自律する意思に誠実に頑固に生きること求めている。かたちにとらわれず、のびやかに、したたかに、仕事も、家庭も、自分の生活も、それを妨げるものと闘うこと。そこから新しい価値が創られ、そこから閉塞した時代も切り拓かれていく——個性的な人間らしい生き方の価値を生み出す女たちの時代が来たと思う。

— 目次 —

巻頭言 突然の転身のなかで 大脇雅子 1

私のライフワーク

私の新世界——江戸時代に生きた女たちをたずねて 門 玲子（女性史研究家） 4

文を書く怖れと歎びを『くろしほの譜——芦田高子』を書いて 皆森禮子 16

皆森禮子の聞き書きから 能登はいらんかね 22

グループで本作り——終わってからが始まり——  
へウイン女性企画◇吉川富士子 24

「別姓」を「家」から見て 小森ひとみ 27

めじゃーなりすとのめ「ミニコミ誌で起こしたい、小さなアクション」 水野富美世 34

あこらメイトへあこら東海復活呼びかけ人◇加藤栄子さん 36

〔連載〕——看護婦 光と影（3） 増田れい子 38

気になる英語 エスニック・ジョーク 奥川 睦 44

あごら読書室 46

会と催し 51

海外情報から 56

テレビから 62

女から女たちへ——新年エール交換 64

女の情報 77

あごらのあごら 78

編集後記 80

# 私の新世界

## ——江戸時代に生きた女たちをたずねて

門 玲子（女性史研究家）

ライフ・ワークとは何だろう。私はこの言葉を聞くと、分厚い広辞苑が目に見え、

私の手元にあるのは昭和四十一年発行の第一版十五刷である。まだ金沢に住んでいた頃、香林坊の福音館書店で買ったものだ。定価二、五〇〇円が一度に払えなくて、三、四回に分けてもらったが、我が家の机の上に置いた時は実に嬉しかった。今でもこれのお世話になっている。

まず「ライフ・ワーク」の項を引いてみると、「一生かけてやる仕事や事業」とあった。この辞書の編者は新村出博士である。二千三百頁以上の、大部の辞書の編纂は、大学者が生涯かけてやる仕事に真にふさわしい。後記をみると、昭和十年初頭から粒々辛苦を積んだ原稿も組版も戦火に焼かれて、一束の校正刷のみが残された。二十三年から再び着手して三十年に出来上がった、と記されている。

大学者のライフ・ワーク、畢生の大事業という重々しい言葉によくつり合う成果で、心

から尊敬の念を覚える。ここまで書いたとき、十一月一日付の朝刊で御子息新村猛博士の訃報を見て驚いた。新村猛博士が父、出博士のあとをついで、広辞苑の第四版を刊行されたのはつい最近のことだった。追悼の記事の中に、第四版の校正のすべての項目に目を通し、最後まで努力されたことが語られている。広辞苑は、学者父子二代にわたるライフ・ワークで、ただただ頭が下がるばかりだ。

ひるがえって我が身をみて、私のライフ・ワークなどと語ることが恥ずかしくなった。広辞苑のような大事業は私などには別世界のことであるが、主婦なりに、その身丈にあったものがあるかもしれない。だいたい、ライフ・ワークです、などと言いちらずに、ひっそりとやるのが私の性にあっているのだけれど。

そこで、まず私の好みにあった主婦のライフ・ワークの定義を列記してみよう。

①これから先ずっと取り組んで退屈しない仕事や事業。

②その仕事から汲みつくせぬ精神的滋養を自分の人生に取り入れられるもの。

③その仕事でお金を得ることは二の次とする。退屈せず、心が満たされた上にお金まで得ようとするのは、虫がよすぎる。しかし、結果的にお金が入れば申し分ないが、それには厳しい世間の評価がからんでくると覚悟しなければならぬ。

④家族の生活をあまり乱さずに、理解と協力が得られれば言うことはない。そんなぬるま湯のような状態はいやだという方は、積極的にうって出るのがよい。自分で責任をとる覚悟ならば、誰もとめることはできない。

以上が私のライフ・ワークの定義である。『あこら』の読者はもっと進んでいて、こんな定義では手ぬるいと思われるかもしれないし、このようなライフ・ワークと趣味はどう違うのかと問われれば、返事に窮してしまふ。

しかし、今回頂いた主題は「私のライフ・ワーク」なので、私好みの定義で通させて頂きたい。さて、話のなりゆきとして、私が長年とりくんできた江馬細香研究について話をすすめよう。

江戸後期の女性漢詩人江馬細香の名を私のはじめて目にしたのは、中村真一郎氏の隨筆の一章を読んだ時である。その時、遠く古く忘れられた存在であった漢詩人頼山陽の女弟子として、その美しい二、三篇の詩とともに細香の名前が私の頭の中に住みついた。江馬細香について、もっと知りたい気持ちになった。昭和四十六年頃である。『あこら』一七二号をみると、『あこら』の創刊が一九七二年とあるから、ほぼ同時期といつてよい。けれども私はすぐ実行に移す性ではないので、細香の名を頭の中においたまま二年ほどぐずぐずしていた。大垣へ細香のことを調べに行ったのが四十八年の二月であった。

私がぐずぐずしていたのがよかったのかも知れない。ちょうどその少し前から、蘭学研究の学者たちが研究会を作つて、江戸後期の蘭学者の家である江馬家に残された古文書の調査を始められたからである。私はその中のお一人、斎藤信先生のご紹介で、その会に参加させて頂くことができた。これは私にとって、たいへんな幸運であった。江馬細香が生まれ育つた環境そのままの場所で、細香の生涯とその作品を調べることができたからであ



る。

細香の生涯とその作品を勉強していく過程で、驚くような発見が幾つかあった。

そのひとつは、江戸時代の女性についての研究がほとんどなされていないことであった。映画やテレビドラマで時代ものが繰り返され、文学作品にも江戸時代を扱ったものが無数にあるのに、江戸時代の女性に正しく向き合って書いた作品が少ないこと。江戸時代の女性たちが堅実に、しかもいきいきと暮らした真の姿が覆い隠されていることである。この発見は江馬細香の生涯を書く間ずっと頭の中であって、薄紙を剥ぐようにその実像に迫っていく手応えを与えてくれた。

その次は、鎖国政策で島国に閉じ込められて、花鳥風月の箱庭のような世界で生きていたように見えた江戸時代の人々が、遅く西欧の文物を取り入れていたことである。科学、医学の分野で「親試実験」を推進して、真理を求める気迫を持ち、思想界でも儒学、蘭学、国学、仏教などを奉ずる人々が深い思索をもとに優れた著作をあらわし、またダイナミックな論争を展開している。それらの思索は、人間の実存の根幹に根ざすものであり、その関心の広さは地球規模に及んでいた。この発見は細香の世界を探る間ずっと私を興奮させたし、また江戸時代の人々に深い敬意を感じさせた。江戸時代は私にとって新世界となった。

私が勉強しはじめるのと同時期に、江戸ブームといわれる気運となって、新聞記事にも

出版物にもこの時代を扱ったものが多く現れるようになった。江戸時代が私だけに面白いのではなく、普遍的な魅力を持っている時代であることを示していると思う。

江馬細香の生涯を書こうとしたときに、私ははじめて人に読んでもらいたいと思った。

自分が知り得た事実を、他の人に伝えたいと思ったのである。それまでずっと同人誌『朱鷺』に参加して小説を書いてきたが、自分のためだけに書いていたような気がする。『文学界』の同人誌評欄でよく取り上げてくれて、小松伸六先生や駒田信二先生が批評して下さった。それだけで満足で、もっと多くの人に読んでもらおうとか、コンクールに応募しようとしたことは一度もない。しかし江馬細香に関しては、読んでほしいと切実に願った。西義之先生は「あわてて始めよ」と励まして、綿密な文章指導をして下さった。慎重に用意して……と言うのが普通だけれど、あわてて始めよという助言は、何事にもものんびりして一向に始まらない私には一種の逆療法的ショックとなって、その助言どおり私はあわてて書きはじめ、四苦八苦して結末をつけることになった。書いているうちに生じた疑問は、頼山陽や江馬細香、その周囲のすぐれた人々のことがなぜこんなに埋もれているのだろう、ということだった。忘れ去られていいような、つまらないものでは決してない、という確信があった。

昭和五十四年に『江馬細香―化政期の女流詩人』という本がまとまって、私の願いどおりに多くの人に読んでもらうことができた。その中のお一人、吉川幸次郎先生からお手紙を頂いた時に、先に書いた私の疑問は解消した。お手紙の中に「……実は私は日本人の漢

詩文は紫の朱を奪うものゆえ純粹の漢語に習わんには妨げなり、初学は一切目にするなという教育を京都大学にて受けました為に本邦儒先の業には一向に不案内……」という一節があった。紫の朱を奪うものとは論語の言葉で、中間色の紫が正色の朱よりも人に喜ばれること、つまり価値の低いものが高いものより力を持つことを意味する。明治以降の学界で、日本人の漢詩文の業績が意図的に埋められていったことがよくわかった。国文学の学者たちは、日本の漢詩文を日本文学ではないとして敬遠し、中国文学の学者たちはそれは本物ではないと無視しているうちに、日本の社会全体の漢文の読解力が低下し、知識階級の人々は欧米の文化、文学を学ぶ方へ向かっていったのである。

『江馬細香』を出版してから四年ほどして、大阪大学の女子学生三宅理子さんから手紙をもらった。江馬細香を卒論のテーマとしたので、私の著書を送ってほしいという依頼だった。はじめてのことなので、たいへん嬉しかった。のちに彼女から直接聞いたのだが、日本漢詩を卒論のテーマにしたいと言うと、指導教官であった黒川洋一博士がそれは大変だからやめるようにと忠告され、彼女の意志の固いことを知って、ではまず女流詩人から始めるようにと私の著書を彼女に見せられたのだという。そこで三宅さんが本をほしいと手紙を寄せてきたのだ。彼女はすぐれた卒論を提出して首席で卒業し、大学院に進んで精力的に論文を書き、学者間で注目されている。そして二年後に結婚することになり、私はその披露宴に招かれた。結婚の相手は阪大付属病院の医師なので、披露宴は阪大文学部と医学部の合同パーティのようになった。その席では花嫁の卒論のテーマであった江馬細香が大きな話題となった。メインテーブルの黒川先生がスピーチに立って、日本漢詩文の研

究が、まだ始まったばかりの広い沃野であることを話され、そのついでに私を紹介して、「その分野で先駆的な仕事をした方です」とおっしゃった。私はその時はじめて自分の仕事の客観的位置づけを知った。自分自身が面白くて、それを他の人にも知ってもらいたいと思って、前後のことも考えず素手でトンネルを掘るような作業を続けたその結果は、そんな意味を持っていたのだと知った。誰に強制されたわけでもなく、全く自分の意志で進めてきた仕事だけに、その喜びは大きかった。

それ以後、日本漢詩文を紹介する本が数多く出版されるようになり、岩波書店からも、『江戸詩人選集』十巻が出版された。

三宅さんは結婚して福島理子さんとなって、さらに日本漢詩の研究を続けている。私は江馬細香の詩集『湘夢遺稿』の全訳を完成し、それが昨年末に出版されたばかりである。

さて、私のもうひとつの仕事について書かねばならない。これも江馬細香研究の時に発見したことにつながるものである。先に江戸時代の女性についての研究がなされていないことを書いたが、その研究を目的に女性史研究会へ知る史の会への結成に参加したことである。

昭和五十二年に名古屋で全国女性史研究交流のつどいが開かれた。そのようなつどいはじめて開かれたものだった。江馬細香のことを調べるために、一人で手探りしている時だったので、誰か江戸時代の女性史をやっている人はいないだろうか、そう思っ出て出かけていった。そして浅野美和子さん、高橋ますみさんに出会ったのだ。浅野さんとはその後

何回か会ったが、その度に彼女は「何かしましうよ」とくりかえした。それが女性史の勉強会を作ろうという意味であることはわかっていたが、何事も始まるのがおそい私は、一向にその気にならなかった。

三年後に私は現在の住所に引っ越した。その近所に矢萩美也子さんがいた。彼女は赤ちゃんを乳母車にのせては我が家に現われて、その度に「何かしたいわ、何かしたいわ」とくりかえしていた。私は彼女が何をしたいのかを明確につかむことができなくて、浅野さんを訪ねるようにすすめたのだ。へあごろの会員である浅野さんならば、彼女の気持ちを汲んで、よい方向を見つけてあげるだろうと考えた。矢萩さんは赤ちゃんをおんぶしてすぐに出かけて行った。明るいグレーにピンクの格子のママ・コートを着て行ったように覚えていいる。帰ってきた時の報告は私を驚かせた。大高に新築成った高橋さんの家の広間で、女性史の勉強会をすることになったという。メンバーは高橋さん、浅野さん、そして「門さんだよ」と言う。私は困惑した。何かやりたいという矢萩さんの情熱を浅野さんに受けとめてもらおうと企んだのに、こちらへ振りかかってきた。いいや、そのうち逃げ出そう、そう思って参加したへ知る史の会だった。ついでに言えばへ知る史の会という名前は浅野さんの命名で、彼女の詩人的資質を感じさせるいいネーミングである。

へ知る史の会は昭和五十八年二月に始まった。翌月からは安藤くに子さん・松崎潤子さんが加わった。それからどんなに多くの人々がこの会を通りすぎていったことだろう。この会はほとんどイベントを行わず、毎月、ただひたすらテキストを読み合い、笠原美保子さんの作って下さるおいしい昼食を頂き、午後は女性の手になる古文書の解説を続けてい

る。各自の生き方を話し合う会のような一時期もあったが、必ずもとの勉強会に戻った。この地味なやり方にあきたりない人は去っていったが、これが性にあう人々が辛抱づよく続いて、かなり難しいテキストを使って古代・中世・近世の女性史を勉強していった。そして七、八年たって驚くほど会員の實力がついていることを発見した。

平成二年から、東京の柴桂子さんが創刊した雑誌『江戸期おんな考』に「知る史の会」も参加することになった。長い間勉強会を続けてきたけれど、研究発表をする雑誌を作らなかつた。それがなかったために、安心して勉強が続けられたという利点もあった。感想文を強制されない読書が楽しいのと同じく似ている。しかし何時までもそれではいけなかつたのかもしれない。柴さんの呼びかけは、ちょうどよい時期になされて、まことに有りがたいことだった。

第一号は浅野さんが「嬬婁喜之の生涯」を、私が「江馬細香覚え書」を発表した。それぞれに長い間とりくんできた主題である。

第二号には安藤さんが「吉田の歌人岩上登波子について」を、松崎さんが「女流俳人華鏡井燕志」を発表した。杉本恵子さんは大坂屋豊女の「善光寺道中日記」を解読してのせた。

安藤さんは「知る史の会」に入ってから一念発起して、県立短大に入り、本格的な勉強をはじめた人である。研究対象となった岩上登波子とは三河遠州地方ではかなり有名な歌人であったが、まだ正当に研究されてはいなかつた。江戸時代に数多くいた女流歌人のほとんどが同様の状態におかれている。登波子の研究はひとつの突破口になるだろう。

松崎さんは俳句の実作者なので、女流俳人はまことにふさわしい研究対象だ。彼女は勉強会のレポーターをつとめる時に、実に綿密な下調べをしてきて私を驚かせた。何かテーマが定まり、糸口が見つければ、今までの勉強がすべて滋養となって、よい成果が得られるだろう、と私は思った。俳諧は江戸時代の庶民に広く愛された文芸で、日々の哀歓がこめられている。どんな女流俳人のいきいきした日常が見られるか楽しみだ。

杉本さんは、これまで見たこともなかった古文書の文字が一字一字読めるのが嬉しくて、道中日記のコピーをいつもバックに入れて持ち歩いて解読した。これによって、大坂屋豊女という江戸時代の商家の主婦の面影が、しっかりと杉本さんの頭に住みついたことだろう。この面影が今後どのように動いていくのだろうか。待ち遠しいような気がする。

第三号には矢萩さんが「島原『輪違屋』の遊女桜木について」を発表した。ようやくお子さんたちが成長して時間ができた彼女は、文字通り東奔西走して、遊女桜木が残した和歌四十数首を発掘して、蓮月尼との交渉もあったその生涯の片鱗を発表した。近世の遊女は文化的にも社会的にも特異な地位を占めるので、この研究は貴重なものと思われる。

森田淳子さんは午後の勉強会で読んだ山田音羽子の「お国替絵巻」と、その道中を追体験する〈知る史の会〉の旅行をレポートにして載せた。音羽子さんを敬慕する気持ちと、柔軟な視線の行き届いた文章となった。

第四号はどうなるだろうか。〈知る史の会〉にはまだまだ後につづく人があると私は見ている。

これまでの研究発表のすばらしさは、まったく未踏の分野にわけ入ったことであり、そ

のため活字で読めるテキストも先行論文もなく、手紙や日記、版本を解読しての発表だということである。古文書の解読が江戸時代の女性史を研究する時の大きな障害であるが、みなその困難を楽しみに代えることで克服した。

もうひとつのすばらしさは、彼女たちの研究対象（歌人・俳人・遊女）が普遍性を持った存在であることだ。だから一筋に追求していけば必ず女性全体の、あるいは人間全体の問題に到達できる。彼女たちがこれらのテーマにずっと取り組んでいくかどうかはわからないが、そうしていいほどの普遍性のある対象だと思う。

今年の夏は会の有志が浅野さんに協力して、『女性史事典』の多くの項目の執筆を担当した。秋には豊橋の女性史講座で、各自得意の分野を担当して講師をつとめた。

さて私の今後の課題であるが、すでに二回『江戸期おんな考』に連載した「江戸女流文学を読む」を、とにかく続けていこうと考えている。この時代の作品は出版されなかったためにテキストが入手がたいこと、日記、随筆、紀行が多く、作り物語が少ないことなど、さまざまな問題がある。平安時代にあのように素晴らしい物語が書かれたのに、江戸時代の女性はずいぶん物語を書かなくなったのかという重大な問題もある。とにかく江戸時代の女流文学を読んで、どんな作品があるかを紹介していきたい。

いつでも逃げ出そうとして及び腰で参加したへ知る史の会々だけれど、いつしか私の生き甲斐のようになっていた。

江馬細香について、もっと知りたいと思ったことから始まった江戸時代の女性に迫る私の旅は、まだまだ続きそうである。これが私のライフ・ワークと言っているのだろうか。



## 日本近代女性の先駆者江馬細香の

### 漢詩集の全訳なる

#### 江馬細香詩集『湘夢遺稿』全三冊

入谷仙介監修・門 玲子訳注

江戸時代後期美濃大垣藩医江馬蘭齋の娘細香の詩集、『湘夢遺稿』二巻の全訳。

細香ははじめ墨竹画を学び、二十七歳の時、江馬家を訪れた頼山陽の弟子となった。世上、山陽の恋人として話題にされてきたが、七十五歳で没するまで生涯を独身で通し詩作に励んだ。

「日本の女流三大詩人は、式子内親王、細香、与諷野晶子である」（黒川洋一博士）と評価される由縁である。

細香は、山陽について漢詩を学び、多くの当代一流の詩人等と交わり、才能にみがきをかけ、その詩は身辺の些事から自然や旅行、また源氏物語等に題材をとり、みずみずしい感覚でレベルの高い詩的世界をうたい上げ、当時の封建的男性絶対優位の社会にありながら自己の才能を思う存分発揮している。

細香の詩は現代に生きる者が読んでも生き生きとしており、まさに現代に通ずる日本最初の近代女性の先駆者ということが出来よう。

訳者の門玲子さんは、細香に傾斜して『江馬細香』という伝記を出し、故吉川幸次郎先生に激賞された人である。今回七年の歳月をかけ、細香の自筆原稿にまでさかのぼって厳密に校訂し、「しつとりとした、きめこやかな風格を生かした訳文」を完成された。

これまで正當に評価されることのなかった細香の文学と業績が、入谷先生の監修と門さんの美しい流麗な訳文によって、ようやく世に送られることになった。

汲古叢書 5・6 四六判上製  
各三〇〇頁／上・二五〇〇円／下・三五〇〇円

化政期の女流詩人

江馬細香

門 玲子 著

好評重版ができました

定価二〇六〇円／送料三〇〇円

BOCC出版部

# 文を書く怖れと歓びを

## 『くろしほの譜——芦田高子』を書いて

皆森禮子

北ぐにの歌人、芦田高子の人生を書きとめた『くろしほの譜』が、平成元年六月二十三日に出来上がった。画家丸木位里先生の絵、と題字で装幀され、皆森禮子著と自分の名前が印刷されてある本を手にして、夢を見ているようだった。

私が歌師芦田高子にあったのは、昭和三十四年であった。幼き日、父を亡くし、結婚を約した愛に破れ、その哀しみの中に、母をも失った。古い街、金沢では、その苦しみを誰に告げることもできず、想いを短歌に託していたときである。

昭和三十八年上京するまで指導いただき、短歌では「不肖の弟子ネ……」と言われながら、歌会や旅行に連れていってもらい、血縁のうすい私には、それがひとり生きることになったときの大きな力となった。

ケースワーカーを夢見て上京したが、公務員の行政職となって二十年過ぎた。男女雇用均等法施行前の男中心社会で、心身ともに疲れ、蜘蛛膜下出血の疑いで入院した。幸い軽度で治癒した。

しかし、気力だけではもう働けなくなっていた。定年を十年残して退職して帰郷した。昭和五十八年は、高齢化社会になりつつあり、老人や年金に人々が目を向けた頃でもあった。退職に際して、ケースワーカーの管理者研修を受けた。

半年後に、ふるさとの老人病院に勤めた。その病院は、過ぎし日に芦田高子と散策し、彼女が生涯の仕事とした万葉植物園を夢見た地にあった。卯辰山の中腹にあったその植物園の夢は実現されず、昭和四十七年病に倒れ、七年間、二度童子（にどわらし）となって、五十四年に七十一歳で亡くなった。患者に接しながら、短歌や俳句はボケ防止にとさえ言われるのに……と、つねに彼女のことが頭をかすめた。

その頃は、痴呆や、老人問題に目を向ける人も少なく、ケースワーカーの呼称さえ知らぬ人が多くて、古い街での仕事は大変であった。医療の現場では、不正が次々に出た年でもあった。東京の暖かさに馴れた身体には、北陸の冬はきびしく、高血圧が再発し、降圧剤を服用したが良くならず、再び上京した。

仕事を忘れて海外旅行を計画したところ、申込みの手違いで「北欧とドイツ」がロシアのレンングラードとなる。昭和三十六年、第一回訪ソ婦人使節団員として彼女が一月月旅行していたことがわかり、それをきっかけに足あとをたどることになった。

古い歌集を探し、知人を訪ねると、若き日にたくさんの方の縁を作って下さっていたことに気づいた。表紙や序文を下さった丸木位里、俊ご夫妻、詩人の永瀬清子先生、福中都生子先生、歌人の中野菊夫先生など……。

私はその頃、文章教室で五枚ずつ書きためていったものが、いつしか芦田高子中心のものとなり、次に自分史を受講し、書いてみると、芦田高子と私の人生の歩みが、時としておなじなぞらえの場の多いことに気がついた。彼女を語るとは、私を語るとをも意味していると思った。

しかし、他人の人生を書くことは、彼女をめぐる人々のプライバシーが心配だった。私はひとり生きる者なのでわがままである。だからなお気になって、彼女の発表した随筆、短歌から材料を選び、他の人が活字にしたものから裏付けをとった。

没後十年というものの、病床で七年、活動をやめて十七年経ているのである。彼女はすでに過去の人になりつつあった。もっと時間を、調査を、と思ったが、教えや話を聞く人の少なくなることを考えて、未熟ながら書くことに踏み切った。

私は「書いた」というより書かせて貰ったという感じがする。いま私の手許に彼女の遺品の万年筆がある。このペンがくるまで本を書くなど念頭になかった。

私はふるさとへ帰る決心をしながら、また東京へ舞い戻って心がみだれていた。ご縁のできた比叡山の無動寺谷に詣でて千日回峰行を満行された内海阿闍梨に「般若心経」後西天皇の宸筆の写しを頂いた。それを手本に一日一枚写経していた。

五十九年十月からの写経が昭和六十三年三月二十一日で一千枚になった。三十一日に持参してお堂に収めて頂いた。そのときの早朝護摩供に女優高峰三枝子氏が来られ、御加持の品としてご自分の台本を出された。小僧さんが「あなたは……」と言われたが私は何も用意しておらず、ポケットの万年筆をお願いした。

無意識に「先生、病気で筆を折られて書きたいことがあったでしょうに、私でよかつたら書かせて下さい」と折っていた。まさかそのことで一年経ずして本になるなど思っていなかった。ペンが走ってくれた感じである。

年譜は自分史講座の自分史ノートに、歌集や主宰されていた歌誌から拾いあげていった。すべて初めてのことである。晩年のことなど、ストレスの多い現在の病気の実態に通じるものを感じたが、ケースワーカーとして知ったことには「守秘義務」もあり、公にできず、歌誌に連載されていた編集日記から、肉体的、精神的に「二度童子」になっていく経過を書いた。

六十三年暮れに出版社に渡し、三月十三日の命日を目標にしたが、印刷物が繁多なときで、そのうえ天皇崩御と重なり、初校のが三月に上がり、白刷りのままであったため、内容や校正、編集など、文章教室の先

にご指導・助言をい生ただし、私も一緒に処理した。

日数の都合で最後の青刷りを見ることができず、頁の入りくりなどあり残念であったが、本のできる過程を勉強した。

七月の、彼女の歌誌の発行を手伝っておられたY氏の主宰されていた歌誌の十周年記念歌会にはどうにか間に合って、ささやかながら鎮魂の書になったことが救いであった。

私はこれまでまとまった文を書いたことがなかった。学校も女学校、女子専門学園の家政専修科。文章とは無縁で、本ができるなど思ってもいなかった。

生前、彼女には数多くの歌弟子がおり、主宰されていた歌誌も発展しつづけている時に、私のようなものが書いたということは、知らぬからできたことだった。後日、千葉龍氏が芦田高子を書く人は五指に余ると、聞こえた人々の名前をあげて、「一人の無名の女性が現れたことに、ある種の戸惑いを感じる」と前書きして、「わずか三年余身近にあったにすぎない若い弟子が四半世紀後に一本にまとめた。その体当たりの勇気を評価すべきだ」と、『北陸中日』に十段抜きで紹介してくださった。

私はその文章に恐れを感じて四百部で絶版にしまった。いま手許に一冊も残っていない。しかし、本が芦田高子ゆかりの人の手に渡り、お言葉やお便りを頂戴し、このことが「生きがい」として書くことの始まりとなった。

本は、たくさんの方の縁を作ってくれた。彼女の母校梅花女学園を訪ねた折、資料室に彼女の歌集があり、その横に私の本が並べて置いてあった。彼女の本のそばに……と涙が出てとまらなかった。資料室長は「よく書いてくださいました。ご苦労さま」とねぎらってさえくださった。

その言葉に、出版したうれしさと、文章のもつ重みを感じてベンをもつ気持ちはゆれた。そして、いつしか写経のつもりで、過ぎし日々のことを書き始めた。公務員として三十年、医療、年金、老人、どれもみな

産声をあげたばかり。試行錯誤で、女性の働く歴史に似ていた。

ふりかえることは、病氣が再発するようで恐ろしかった。だが、病氣の原因を吐瀉物から見つけるように、いま一度たしかめないと、新しい出発にならないと思った。その思いに突き動かされてそれまでの四十年間をたどってみた。

公務員生活の医療の現場と行政、年金相談の実態、老人病院のケースワーカー、比叡山での生活など、四百枚ばかりになった。これを平成三年に書き上げた。それまで不眠に悩まされ、高血圧症で悩まされていたのが、うそのように消えていた。

平成二年の春、柴桂子氏の『幕末維新を生きた女たち』の講座を聞いた。その後、彼女の収集した女性日記を読む会に入り、平成四年、取材旅行に同行させてもらった。彼女の主宰している『江戸期おんな考』の三号にそのときのこと掲載された。

十月には箱根の懇談会にさそわれ出席したが、雑魚のとまじりで、集まった人々が大きく見えた。柴さんによると、各地の開発や旧家の建て替え、世代交替で、古文書や日記が廃棄される危機にある。それができる限り集めて後に伝えたいと言う。「一人では全国に埋もれている史料の発掘や整理研究はできない。あなたは石川県生まれだから、せめてふるさとの方だけでも調査しなさい」と励まされた。

帰郷した際、学生時代もろくに足を運ばなかった図書館に行った。整備され立派になっており、金沢市は戦争にもあわなかったので古文書もあった。いままで自分の生まれた土地のことを何も知らなかったことに気づいた。

それまで能登半島のへんぴな田舎で生まれたことを恥じていたが、まだ開発されず、古い文書や風習が残っている。集まった人たちのように、学歴や専門の知識は乏しいが、彼女たちより長く生きて、ふるさとがあり知人がある。私にも資料収集はできるじゃないかと……と、その後帰るたびに心して歩いた。講座の中の

人物の絵が、色紙が、知人のところにある。ひとつ、またひとつと資料が資料を呼んでくれる。幸いなことに私には時間だけはたっぷりある。資料探しとともに女学校時代の友を訪ねる、彼女たちは村の旧家に嫁いでおり、また亡父母のはらからに連なる人々も多く、研究室の人々と違ったことが見えてくる。

みな、いやな顔もせず昔ばなしをして下さる。風習など、土地で生まれ育って生活したものしか知らぬことも多々ある。私はそれらをひとつづつ書きとめていきたい。「早く書いて見せて……」とさえ言ってくださる。

このようにして歩いて、能登半島の俳人、森岡扶卜の妻、文遊のことを知った。夫妻の句集を見つけた。柴さんから「国会図書館にもない、まぼろしの句集」と言われて驚いた。

私は能登半島へ三回通った。句集、名月塚、力ずもふ、ひぐらし笛、蛛の舞、袖みやげ、津守船、花の加多見、森のほとり、風も秋、空の旅寝など十句集あった。これらは上梓されず、自筆本だけであり、黒島の森岡家に保存されている。

森岡家は現在九代目であり、一昨年亡くなられた八代目は、亡父の友人の知り合いだった。不幸にも死後、火災で家屋が焼失された、資料は焼け残った土蔵の中にあるという。訪れた時は再建中だったが、暮れには完成されると言われた。新年早々お話を聞きに行くことになっている。

私は学問的なことはまだわからない。歩くと資料が集まってきてくれる。いままで男社会でその影にかくされていた女性が、世にでたがっているだろう。資料は難しくて判読はできず、私には「猫に小判」の感じもするが、いま、収集しておかないと散逸してしまう。私が整理できなくとも、収集さえしておけば、どんなかがしてくれて後世に伝えてくれるだろう。

若き日に医者を目指したが、母子家庭では無理と、病院の院長室に勤務、早く嫁さんと言った母の願いもきかず公務員として働いて親不孝をした。医療の現場から行政へ「医療のマルサの女」と、男性の中に一人

混じって監査し、心身ともに疲れた。

高齢化時代に先がけ、年金相談などもしたが、職場では一事務員でしかなかった。それでも一生懸命に働いた。老人病院のケースワーカーでは、患者と共倒れの感じで、愚かなことと悔いたこともあった。が、いま物を書くこうとして、ひとつも無駄ではなかった。

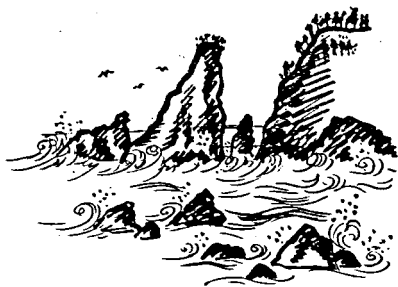
私は一人で生きて、残す財も子どももない。今年は五回目の酉年を迎える。もうとどまる時間などない。少しでも歩いて年老いた人々に話を聞き資料を集めること、これまで生きた女性の足跡を少しでも残し、この世に同じ女性として生を受けた私の證（あかし）にしたい。そして歌師芦田高子の教えにむくいたい。

## 皆森禮子の聞き書きから

### 能登はいらんかね

〽能登はいらんかね、いらんかね……

坂本冬美の歌をマイク片手の人々が声をはり上げて歌っている。この曲は「かけた徳利にたらこのつまみ」で始まるが、平成になった能登半島は、町が市に、村が町となり、豊かになっている。





昭和の初めまで貧しく、食べるにこと欠き、男女が季節的に加賀や富山の風呂屋、料理屋、宿屋に出稼ぎして、田畑仕事の始まる三月ごろに帰った。

「冷やで五合、ぬくめて五合、しめて一升もあれば良い……」

歌の文句とはほど遠く、大正の初めごろは暮れから百日稼いで五円たらず、それにろうそくなどのみやげが報酬だったという。

だが、その仕事にもありつけず、冬になると金沢や富山の街なかを、「能登はいらんか、いらんか」とふれ歩く屋根の雪下ろしの出稼ぎ人がいたことを、金沢生まれのおばばが話してくれた。

昭和十六年、父や祖父が亡くなって、父の勤務地から村に帰るまで、私は村人の貧しさを知らずに育ったが、きびしい北風が、雪が、吹き込むのを防ぐ戸もなく、むしろを下げた家があり、畳はなく、いろいろ端にござが敷かれればいいほうだったこと、戦後やっと電灯のついた家もあったことを、おばばの話で思い出した。

昭和初期に奥能登に宿泊して調査したという、民族学の三谷先生に先日お会いし、文献を目にした。現実にはそれよりもっともっと貧しかったが、部落の恥と、誰も本音を語らなかったのだろう。

五年前に、法要に帰った生家に、なつかしい人々も集まった。代がかわり、老人たちは座敷に座る人ではなくなっていた。

「まだ生きとりますわいネ」と台所で口を指で押さえて私の手を取り涙する姿に、私も無言でにぎり返すしかできなかった。

もうその人たちも亡くなった。生きていても豊かになった今、貧乏話は恥になる、と語らない。

「能登はいらんか……」と、血を吐き叫びさよった人の孫が、曾孫が、何も知らずに今日も歌っている。その歌を聞くと、闇のしじまに思い出の人々の顔が浮かんで消えていく。

## グループで本作り

### ——終わってからが始まり

#### 〈ウイン女性企画〉吉川富士子

昨年（一九九二年）の二月十八日（火）、〈ウイン女性企画〉のおしゃべりタイムの時、高橋ますみさんから「とにかく一冊本を出してみるといいから」と、東京のアドア出版からの本作りの依頼の話があった。元氣印の女性グループの紹介の本で、一年がかりで作ること。私がデスクを引き受け、人を募ってはどうかと。

私は、この話に舞いあがってしまった。先のことなど考えず、元氣よく「はい」と返事をしていた。私は〈ウイン女性企画〉のメンバーになって一年ほど。

一月から実行委員のメンバーにもなったが、毎週火曜日に顔を出し、いろいろな人に出会えるのが楽しかった。また自分にできそうな仕事を少しずつ始めていた。講演会の手伝い、雑誌に自分たちの仕事をアピールするための料理の写真撮り。料理を作ってくる人、コーディネートする人、撮影をする私の三人組で毎週写真を撮っていた。また、朝日新聞の日曜ひろばのコラム「得々メモ」の記事を書き出していた。

〈ウイン女性企画〉では、仕事は何でも申告制で、黙っていてももらえない。「この仕事をやりたい人？」と聞かれた時、「やります」と答えて仲間に入る。その人の能力よりもやる気が重視される。たいていグループで仕事に取り組み、実行委員長やデスクを決め、話し合いで進める。

コラム執筆の際も、文章力よりもアイデアに重点をおき、高橋さんやデスクの重原淳子さんが文章に朱筆してくれ何度も書き直しをした。そしていつのまにか、文章力がついてくるというぐあい。

私はやる気だけで引き受けてしまったものの、期待に答えなくてはと、さっそく話のあった日の帰りに、書店に寄った。私は、たまたま新聞の紹介欄でアドア出版の『いい女の条件』熟年一〇番著（一、二〇〇円）を、題名にひかれて読んでいた。自分なりのいい女になりたいと思っていた。書店では、アドア出版社のリストを作ってもらい、何冊かを注文し、あとは図書館で探すことにした。

その日、運営委員の伊藤登代子さんから手伝うと電話がはいる。いい経験になるし、地域のグループも知っていると。

翌日、高橋さんにいろいろな質問事項を書き電話をした。翌々日、社長と連絡がとれたと高橋さんから電話。名古屋を中心に東海地方の女のネットワークキングの本を作ることになる。

私は重原さんに相談をした。彼女の方が書くことに実績があるので本作りのデスクにもふさわしいのではないかと思っていた。彼女は、自分には他にやりたいことがあるので一緒にはできないが、協力してくれる

と約束してくれた。そして私の悩み、私が所属しているボランティアグループの代表が決まらないことなどを聞いてくれ、いろいろアドバイスをくれた。一度に手を広げるのはたいへん、今あなたにとって何が大切なのか、やりたいことを整理して自己管理をすること。ネットワークは心配いらない。ウインのメンバーでもいいはある。子育ても心配いらない。子どもは生きていける力さえ身につければいいのだから。まず、スケジュールを決め、グループの傾向を三つか四つにして、コンセプトを持つといいと。そして最後に、自分は書くことが嫌いだけれど、あなたは好きなんだから、どんどん書きなさいと励ましてくれた。

二月二十八日に第一回目の打ち合わせを高橋さん宅です。メンバーは、伊藤さんとヘウイン女性企画のインフォメーションでこの本作りを知って参加した横田早苗江さん、ヘウイン主催のセミナー「働く」の石野三紀子さん。出版にむけて二か月の短期決戦でやろうと高橋さん。そこで、女性のグループについて

の学習をした。また、グループ集めにアンケート方式を採ることにした。

三月十一日、二回目の打ち合わせ。塩崎文香さんが新しく小さい男の子を連れて参加。高橋さんの記事を雑誌で見て、取材を申し込んだところ、逆に仲間に誘われたと。何かピンとくるものがあった、「もしかしたら、おもちや図書館のことで、電話で私に取材した人?」「そうです!」。彼女はすでに、東京の母親向けの雑誌と業界新聞のフリーライターをしていた。

高橋さんの司会で出版社に立ちあがり資金を欲しいと要求することになった。また、どういうものを作りたいかという信念や思想、グループの範囲を話し合った。次回、出版社の社長とはじめての話し合い。

三月十九日、中込尚子社長と共に、新メンバーがさらに三名増える。《ウイン女性企画》の「女性アドバイザー養成講座」を受講していた石田涼子さん、西村昌子さん、堀久美子さん。メンバーの自己紹介から始まり、話が具体的になる。

このメンバー十人で、あとは本のできあがりを待つだけとなった。今春（一九九三年）発行予定。

内容は、東海地方中心に北陸までも手をのぼし、元気印の女性グループ三三七を紹介。読んでためになるコラムも満載。元氣になりたい人に特におすすめ。てんやわんやの本作りのプロセスは、また機会があったらお知らせします。

#### 自分さがしの講座のおしらせ

とき／1993年1月28日～3月4日 10時～12時  
ところ／スペースウイン

参加費／5千円（会員） 8千円（会員以外）

- |     |          |                |
|-----|----------|----------------|
| 第1回 | 1月28日（木） | 身近な人間関係を見直す（1） |
| 第2回 | 2月4日（木）  | 身近な人間関係を見直す（2） |
| 第3回 | 2月18日（木） | さわやかな自己主張（1）   |
| 第4回 | 2月25日（木） | さわやかな自己主張（2）   |
| 第5回 | 3月4日（木）  | 自分のことは自分で決めよう  |

申込み先 ウイン女性企画 ☎052-251-9064

## 「別姓」を「家」から見て

小森ひとみ

長い歴史の中で培われてきた『家』の重みは、一面では、それが日本独自の文化を創り上げてきたと言えるほどしっかりと根を下ろし、一朝一夕に意識の改革ができるものではない。『嫁・姑』という漢字は女の在り方を見事に表しているし、「主人が：」「家内が：」という表現は、日常使わざるをえない場合の方が多い。年中外出して家に居つかぬ妻でも、人はやはり「奥様」と称する。

言葉の使い方なんて、あくまで形式だけのこともかもしれない。しかし、当たり前に使っているうちに、気持ちの中までそれに支配されてくることが、ない、といえるだろうか。結婚の形態にも、家の重みをしっかりと感じさせる言葉が依然として幅をきかせている。十七年前、当時同僚だった夫が初めて私の家を訪れた時、膝を崩さず座布団も当てないで言った言葉は、「お嬢さんをいたきたいのです」（その頃は私も一応「お嬢さん」であったと思う）。その後、夫の両親が尋ねてみえた時も「娘さんをいただけませんか」との表現。そして紆余曲折ののち（女ばかりの長女であった私だから、そのあたりのいきさつはご想像がつくと思う）、父は、女の子なんてつまらんと憤りながらも、遂に「それでは貰って

いただきます」と返事をしたのであった。しかし、そんな言葉の使い方に、「当時の私」は何の違和感も覚えなかった。

もちろん結婚式には、ホテルの前にでかでかと小森家・中村家（私の旧姓）と銘打ってあって、その気のある人が席表を開いてみれば『ひとみ』の名だけは見つかるだろうけれど、『中村ひとみ』という人物は、その日を境に永久に消滅することになったのである……が、当時の私は何の寂しさも覚えなかった。

確かに「愛する人のもとに嫁ぐ」という言葉の響きは甘い。「あなたの色に染まります」という白無垢もロマンチックに思える。私にも長女という意識が少しはあったから、嫁に行ってしまうということに抵抗を感じていなかったわけではないけれど、彼の、「名字なんて、あくまで形式だけのこと。親子のつながりには、何の変わりもありはしない」という言葉に、そんなものかなとうなずいていたあの頃は、まさか今日という日が来るとは思いもしなかった。そして、ロマンチックな白無垢を脱いだその日から、私の代名詞が「うちの嫁」となる日々が始まったのである。

夫の母は頭の良い人だったし、人柄も竹を割ったようにさっぱりした気性の人であった。しかし、生きてきた世代の隔たりだけはどうしてもなかった。

まずぶつかったのが、私が実家へ出かける日。（この『実家』という言葉も未だになじめない）ので、今は両親の住む町名を使っている。「夕方までに帰りまうす」と、軽く声をかけて出ようとした私に、姑は静かに諭した。「実家へ行く時は、〇〇の用事で行かせていただきたいのですが宜しいでしょうかと、尋ねるのが礼儀……」私は一瞬、何を言われているのか

理解できなかった。それまで「友だちと会って来よう」「本屋さんをのぞいて来よう」と告げた時は、ハイハイと普通の返事が返って来ていたのである。

私は、「デパートへ行って家を半日あけると、実家へ半日出かけるのと、家を留守にすることにどこか違いがあるのですか？」と、真面目に尋ねた。思いもかけない質問に面くらった姑は、「だってあなた、あんたは小森家の人なんだから……もう、ここに嫁に来たんだから……」私も、素朴な（かどうかはわからないが）質問を繰り返す。「確かに私は、小森なにがしの妻だけど、その何々家というのは何ですか？ 夫と私にとって、こちらの御両親も私の両親も全くなじ『輪』であると思っていたのですが、違うのですか？」

すっかりカルチャーショックに陥った姑は、啞然として言葉をなくしてしまった。現代でも、姓を名乗っている親族とのつながりのほうが強いと当然のように考えられているのに、二十年近く前では無理なことだったと思う。

干支を信じるわけではないが、姑も私も「五黄の寅」という部類に属するそうで、周りから相性をかなり懸念されていたらしいが、姑は頭の切れる人であった。「うちの嫁」がどんな考え方をし、どんな行動をしたのかを、理解しようとしたらしい。そして、私が拒絶反応を起こしそうなルールを押し付けることは、次第に少なくなっていた。要するに、「うちの嫁は『当たり』か『はずれ』かわからないが（彼女にとっては、完全にハズレである）、当世の若い者の考えは、こんなものかもしれない」と、気持ちを切り替える——というよりサッサとあきらめてくれたわけである。

私自身、何々家に嫁ぐという意味を知らなかったわけではないし、結婚する前に『嫁の心

得』もいくつか聞かされていた。「その1、嫁はとにかく頭を下げなさい。いくら下げても下げ過ぎることはない。向こうの家の植木鉢にでも頭を下げるつもりでいけば間違いない」「その2、とにかくいそいそと立ち働きなさい。四人のお茶なら、二人分ずつ二度に運ぶくらいにすれば、いかにもかいがいしく動いているように見える」等々。でも、嫁の意識に欠けている私は、それらを一度も実行したことはない。

しかし、同年代で今もなお、嫁業を頑張っている人もいる。彼女は、自分の妹のセーターを編んでいるのを見つかつて、お姑さんに「あなたが自分の時間をどう使おうと他のことなら口をはさまない。だけど縁の切れた妹さんのを編むのは困る。まだあなたには、この家の嫁という自覚がないのか」と、涙ながらに言われたという。彼女は、かつてお産のあと、実家のすぐ近くの病院から直接実家に戻ったら、電話で姑にひどく叱られ、あわてて生後七日の赤ちゃんを抱いてタクシーで一時間以上とばし、舅姑のもとで「無事退院させて頂くことができました。しばらく実家で勝手をさせて頂きたいと思いますので、どうか宜しくお願いいたします」と挨拶して、改めて実家へ向かったというエピソードを持っている。

このお姑さんのきわめつけは、軽い事故で足を痛めて一か月ほど寝たきりになった時、ベッドの上から彼女に言った言葉である。「今、あなたに与えられた精神修養だと思って、私の世話をして下さいね」。

もしかしたらそのお姑さんは、自分も胸のちぎれるような苦しさを乗り越えて、自分の身内との縁を断ち切ってきた歴史があって、それを後代に望んでいるのかもしれない。そんな環境の中で友人が、時にグチりながらも割にのんびりと暮らしているのは、私からみると頭



が下がる。彼女の言葉は明るい。「長い物には巻かれろ……よ。もう大して長くは続かないわ。あの人も先が見えてるもの。お母様たちの分だけは、おっしゃるとおり濃い味付けにしている……」。もしこのあとに、「ウフフ……」と含み笑いでも加わったとしたら、もうブラックユーモアである。

さて、私のほうはあきらめのよい姑を持って、『家』とか『嫁』とかのしがらみから少し離れることができたと思ひ始めた頃、すでに改姓を後悔させる伏兵が待っていた。娘の卒業式で、かつてのクラスメートに再会して驚いたのだ。もちろん娘のクラス名簿は貰っていた。も、姓が変わっているため、お互いが分からなかった。その上彼女は仕事を持っていたため、やむをえぬPTAにはおばちゃんが出席されていた。その時の再会は、嬉しい反面複雑な気持ちであった。自分の生きてきた絆が、それも華やかな青春の足跡が（というほどオーバーなものでもないだろうが）結婚を境にブツリと断たれていたという事実を痛感せざるをえなかったのだ。こんな感情は、単なるセンチメンタリズムだと一笑されたことがあるが、ほんとうにそれだけなのだろうか。

先日家を改築したので、この際と思ひ整理を始めたら、一人一人が、これは思ひ出の品だとかこれだけは捨てられないなどと、一見ガラクタをしまいこんでしまった。形こそ違うけれど、旧姓は自分の人生の何分の一かを共に過ごして来たもの……愛着があっても当然ではないかと思う。

しかし、結婚を機に新しい自分として出直したいと願う人は、今までどおり改姓すればいい。また、「彼の姓を名乗る」ということは、彼と一体になる証。そして改姓は、彼に一生つ

いて行くという誓い」と思うなら、それもいい。ただ、大きな声では言えないが、私が十七年前、そのとおり、そのまま、と思っていたことは事実である。そして今「彼について行く」気持ちで、「彼と共に歩こう」と、ほんの少し変わっただけのことである。

私があちこちで別姓について語ることを、夫は決して止めはしない。将来法がそれを認めれば、そして私がそれを望むなら、旧姓を名乗ってもかまわないと言う。しかしそのあと必ず首をかしげる。「そんな形式に、どうしてこんなにもこだわるんや？」夫婦決裂ではないけれど、この件に関してだけは、お互いに邪魔をしないという程度の平行線である。もしかしたら国会の代議士先生なども、「なんでこんなことが問題になるんや？」と、首をかしげてみえるのかもしれない。

しかし、男性に理解が乏しいのはともかく、同じ女性から足を引っ張られる時は、ちょっと寂しい。「あんたの所、ダンナとうまく行っていないと違う？」「ウーマンリブなんて近頃流行らんよ」「こんなこと新聞に書いたりすると、ダンナの出世の妨げになるよ」大きなお世話です！とも言えない。かなり本気で氣遣ってくれているのだから。でも夫とは他にトラブルはないし、私の書いた物で周りから多少とやかくはあっても、まさかそのせいでダンナが首になることはないであろう。（甘いかな？）

それでも、年配の女性のほうがまだわかってくれる。それなりに「妻」や「嫁」をやっているから。しかし、若い娘さんが古式そのままに嫁いで行くのを見る時（伝統を受け継ぐ大切さは十分承知しているのだけれど）、他人事ながら不安を感じる。

跡取り（この言葉も使い方が難しい）の所へ嫁ぐというお嬢さん。夫の両親と同居ではな

いけれど、荷物はすべて相手の親元に運び込み、親類に荷披露を済ませてから、生活に必要な物だけを新居に移すようにと言われたという。つまり、必要ない物がかなりあるということとで、たとえば、桐の夫婦簞笥に着物、多過ぎる客布団に座布団、花器茶器等々……。向この家から「鏡台は女の命だから上等の品を」と言われて買ったけれど、新居用は簡単なドレッサーにしたので、この鏡台も置いていくと言う。その他留袖・喪服・色無地等には婚家の紋を付けるようにと、細かい指示があったとかで、彼女も多少は憤慨していた。「わずかな結納金だけで、勝手なこと言うと思わない？『大事なお嬢さんをいただくのですから、身一つで結構です』って言うべきだと思うの。それが常識でしょ？」常識かどうかは知らないけれど、それでも彼女は、何やかやと言いながら、トラックを連ねた荷と共に、先方へ貰われていった。そして今、彼女は妊娠四か月。戌の日の帯祝いには、絹の腹帯と、紅白のお餅を親類の軒数分持つて、実家の親が「お世話をおかけしますが宜しく」と挨拶に来ることになっているという。私も通って来た道だから別に驚きはしないが、このままの形を何のためらいもなく次の時代に伝えていってかまわないのだろうか。今、彼女に口を出してみても多分無駄だと思う。かつて私がそうだったから。しかし、もし「戸籍上の夫婦の形」を変えられることができるならば、その事実はその本人の、そして周りの人々の「意識の在り方」を、もう一度見直すきっかけになるのではないかと考えるのは安易だろうか。別姓夫婦の実現が、一挙に家制度の改革につながると思わない。でも、ここで石を投ずれば何らかの波紋は起きるに違いない。それを一時のムードに終わらせるかどうか、今後の私たちに課せられた課題……。

## 「ミニコミ誌で起こしたい、小さなアクション」

水野富美世

「静かにしないと殺すぞ!」

サスペンスドラマを思わす台詞が、彼女の耳に突き刺さった。一年半過ぎてやっと風化しかけたレイプ体験のことを、友人Sは淡々と語ってくれたのだった。幸い、未遂に終わったものの、それからしばらく彼女は家から出ることもできず、三か月してやっと始めた外出は、男性が少なく明るいうちに帰宅できる職場を探すことから。以来、護身のための合気道を習っているという。

男性優位の歴史と、性情報の氾濫が招く悪質な犯罪を防ぐ方法は、今まだ存在しない。このことを、こみ上げてくる怒りの中で、私は再認識した。同時に、自分にも起こり得ることなのだと肝に命じた(命じざるを得なかった、と言うほうが正しいのだが)。

同じ席にいたもうひとりの友人Mは、やはり今の世の中は女である自分には納得できないことが多いと言いつつ、「私は男性優位を逆手に取って、おごりたがり屋の上司にはおごらせておくよ。自分で払うって言い張るよりそのほうが楽だもん。そういう自分、本当は好きじゃないけど」と、さめた表情で処世術を語ってくれた。

女性の社会進出の歴史はまだ浅い。社会構造の修正や人々の意識改革にはまだ相当の時間を要するだろう。その中で、私たちは屈辱感と戦いながら自己防衛策をつくり上げ、世を渡り抜けている。しかし、女性が自己防衛策を強めれば強めるほど、社会の軌道修正は立ち遅れて行くんじゃないか。そんな懸念を、私は捨てることができない。

地方新聞『東濃新報』の記者をしていた時期がある。先輩の女性記者は「私が入社した

当時（今から十数年前）は、女性記者なんてのが受け入れられる時代ではなく、東濃新報自体も市民権を得ていなかった。だから取材は『女の記者が何しに来たんだ』という視線にさらされながら、東濃新報とはそもそもこういう新聞で……という説明から始めなきゃ話にならなかった」と、苦労話を聞かせてくれた。彼女と入れ替えに入社した私は、彼女の築いた信頼と時代性の上に乗っかって比較的に動き回ることができたと思っている。

そして今。新聞社を退社してフリーになった私のところに、時折舞い込んでくる話がある。「ミニコミ誌を作りたいので、ノウハウを教えてくださいませんか」。三度ほどあった電話の主はいずれも女性。取材先で知り合った人、人づてに聞いて電話してくれた人たちである。彼女たちは、自分の考えていることを活字にしたい、女性のネットワークを広げたい、などと熱っぽく語りかけてくる。こんな電話が入るのも、先輩の残した足跡があったのことに感謝しながら、受話器の声を聞く。その内容や方向性には、私の考えと合致しないこともあるけれど、ミニコミ紙を作りたいという意欲は私を動かすのに十分。自分の持つわずかなノウハウで良ければと、できることは引き受けてきたし、これからもそうしていくつもりだ。

多くの女性が、自分たちの立場をもっと心地よいものにしたいと思っている。それには自己防衛という方法もあるけれど、外に向けてアクションを起こすこともまた意味深い。私は、たとえミニコミ誌という小さな活動でも、それを始めようとする勇気を持って、力で応援していきたいと思っている。

（フリージャーナリスト）

## あごらメイト

〈あごら東海復活呼びかけ人〉

### 加藤栄子さん

「その人とどう関わっていきたいのか、どのようにつなげていくのか」——彼女の口からはいつも私たちに人間関係の未来を問う問いかけが発せられる。その問いかけは彼女自身が常に自分に問いかけている姿勢でもある。

加藤栄子さん、その人は岐阜県瑞浪市在住の親業インストラクターである。親業は、アメリカのトマス・ゴードン博士が提唱した「親と子の愛のかけ橋をつなぐ」ための教育プログラム。加藤さんは地元瑞浪市や土岐市を中心に講座を開催している。本来親と子の良

い関係を築いてくれた  
めのものである講座が、  
実は自分探し、自分を  
見つめるよい機会だっ  
たと多くの受講生は振  
り返る。

そして、自分探しを  
しながら本音で語り合

える場がなんと少ないことかという彼らの声を聞いて、加藤さんは二年前、「ダベリング合宿」を始めてしまった。場所は多治見市にある地球村。豊かな森に囲まれたログハウスで木のぬくもりを味わいながら、初夏と晩秋の年二回、毎回延べ百人の人が各地から集い、我を語り、また違う人生に触れる。加藤さんは声かけから宿泊の調整、三食の献立、野菜類の搬入など、もっぱら世話役として細やかな神経をゆき届かせている。夜を徹して皆と語り合った後、数時間の仮眠をとり、朝食の味噌汁を作り始める。「皆さんが『おいしい朝ご飯!』と言ってくださるのがうれしinyわ」と美濃弁でさわやかに言うのを聞いて、(こんな大変なことなのに……)と私はひたすら感心しているのだが、彼女はこともなげに会を重ね、昨年十一月で五回目を迎えた。さらにこのダベリング合宿は、彼女にとっての修行の場であるというのだ。それぞれの人があるがまま、自分はどれだけ受け入れることができるかというのである。表面的にはいつも笑顔を絶やさない彼女



の内面は非常にストイックであるらしい。一

昨年九月、加藤さんは親業の近藤千恵理事長講演会を瑞浪市で開く

ため、タイアップした青年会議所のメンバー

に積極的に接触し問い

かけを発した。今までの社会態勢の下での思いこみと

も言える彼らの理論や思考への切り崩しをはかったのである。それが功を奏し瑞浪JCの活性化に影響を与

え、またメンバーの企業の社員研修をせひして欲しいと声がかかるようになった。そこで人の輪、また以前に培った婦人会とのつながり、親業の受講生などが

枠を越えて出会える場を持ち、国際化社会に向けて、地域の生涯学習や、文化的なつながりの芽を育もうと、

へであい、ふれあいばあていなるものを加藤さんはまたまた始めてしまったのだ。これも「意識的に続け

ていきたい」と語る彼女に、私はまたまた感心しているのである。

この加藤さんのありあまるエネルギーは、一地方にくすぶっているはずがなく、名古屋のウイン女性企画の運営委員として、また数々の企画の実行委員長として、手腕をふるっている。斎藤千代さんの「ピース・ピルグリム」をもとに企画された「湾岸戦争の後で」、そして高橋ますみさんの「自立の、夢をかたち」の出版記念会などで、そのリーダーシップは遺憾なく発揮された。彼女は豊かな身体に大判のストールや凝ったデザインの上衣をまとい、さっそうとスペース・ウインへ現れる。そしてアルトの声とよく笑う笑い声はスペース・ウインに高らかにこだまする。ウインの運営会議で議題が暗礁に乗り上げた時など、彼女の意見は前向きでかつ皆を勇気づけるものがある。高橋ますみさんの良き理解者である。ウイン女性企画に加藤栄子あり。あこら二十周年を記念して〈あこら東海〉復活の呼びかけの中心人物でもある。(下村美恵子)

看護婦・光と影 (3)

出口文子さん

聞き手 増田れい子

出口さんは、大阪府下の半官半民の大病院で働く准看である。一九四九年、兵庫県生まれ、四十三歳。高卒だが、正看（高看）への道はせまく、たまたま見つけた大阪府医師会准看護婦学校（一般的には中卒で入る）に進み、昼間は病院で働き夜は勉強の二年間ののち、正式に准看の仕事についた。

以来、小児科病棟に十年、結婚し、こどもを二人産むあいだは同外来勤務、再び病棟に戻り現在は整形外科病棟で働いている。

勤続二十三年のベテラン。こどもは成長して中三（長女）小六（長男）になった。

ご存知のように、准看と正看の二種が、日本の看護婦の世界にはつくられており、現場では正も准も同じ看護の仕事をするのだが、准看はリーダーにならない。初任級が異なり昇給が異なり（つまり正看より下）、勤務表の名簿順も正看とは区別されて、二十三年の経験のある出口さんでも今年入ったばかりの若い正看の次に記される。

ゲタ箱も一番下段を与えられるなど、准看はツライ思いをすることが往々にしてあるようだ。そんな准看護婦が、三十五万人もいるのが実情。看護婦さんの半分近くが准看という数字にあらためておどろく。

ところで、出口さんはなぜ、准看にとどまっているのか。というのは、進学して三年学んで国家試験に合



格（准看の場合は都道府県知事の免許）すれば晴れて正（高）看の身分になり、そういう道も制度上はある。それに挑む人もいる。しかし、出口さんはその道を行かなかった。

「私は、准看をなくすための運動の方が、大切だと思っただんです。それで正看を目ざさなかった。この選択は間違っていたかなと思う気持ち、正直いってあります」

准看廃止。看護婦さんの労働組合、医労連はもちろんのこと、日本看護協会も看護婦の地位の向上と確保、質の高い看護を実現するためには准看廃止、正看一本化をにかけて、活動している。

出口さんはその先がけの一人として、正看への道を自ら犠牲にして仕事と運動にはげんできたわけだ。

しかし、なかなか一本化に到達しない。四十三歳にもなれば、正看なら堂々たる婦長職にあってふしぎはない。准看では、ヒラである。指導力や影響力、決定権を持ってないし、体力は衰えてくるのに、ヒラである限り、深夜勤のローテーションは不可避だ。

もうひとつ准看が悲しいのは、研究テーマを持たされないこと、研修の機会からはずされることである。それでも、看護婦という生き方を自ら選んだ私、途中で白衣は脱げないと肩をあげる出口さんだ。

「日勤が二日続くと、その二日目の朝はからだが軽いですね。よくわかります。看護婦ってクスリづけなんですね。私もクスリはいつもいっぱい持ってます。ビタミン剤は毎朝飲んでますし、昼休みにはドリンク剤を必ず。そうすると午後しっかり働ける気がする。頭痛薬で視神経をやられるタチなんですそのクスリも。かわい袋に入れてぶら下げると、看護婦さん、何入れているの？って患者さんにきかれます。

日勤二日目が一番からだの調子いいですね。あとはいつもけだるい。慢性疲労症でしょうね。でも入院するほどの病気にかかったことはありません。夫の方は一度たおれちゃって……」

出口さんの働く病院は、ベッド数四二八、外科、内科、産婦人科、整形外科、小児科あわせて八つの病棟

があり、看護婦は二百人、准看は十五人、他に病院付属の看護学生が四十人いる。

出口さんの現場、整形外科病棟は五十三床。看護婦は婦長以下十八人（正看十四、准看——つまり出口さんのこと、学生三）の陣容。夜勤は月八回か九回。日勤六、準夜三、深夜三人の割りふりで交替勤務する。

婦長（一人）のほか日勤なら日勤チームにチームリーダーをおく。准看はこのチームリーダーにもなれないのが原則。このごろ手不足で、出口さんもチームリーダーになってほしいと頼まれるが、給料のことを考えると、二の足をふんでしまう。責任に見あった待遇なしに、チームリーダーを引き受けることはできないと思うから。

日勤は午前八時半から午後四時半、準夜は午後四時から午前零時半、深夜は午前零時から午前九時半ごろまで。

日勤の人が午後四時半に終わり、準夜の人は同四時から勤務につく。この間三十分のダブリがあるのは、この時間帯に重要な「申し送り」をするためである。

（だから看護の一日というのは二十四時間ではなく、一日のうちほぼ三十分ずつ三回の申し送りをする）を計算に入れると、二十五時間半を要するわけだ。看護の現場に流れる時間は普通より長いといえる。

整形外科の病棟にいる患者の多くは、骨折患者、腰痛、椎間板ヘルニア、頸椎症、リウマチ、ガンが骨に転移した患者、それからお年寄りの骨粗鬆症などが多い。

悪性転移は別にして、入院日数は短くて一か月、長い人で一年。三か月くらいが一番多い。手術は週二回。いまは九十歳の高齢でも全身麻酔で手術をする。麻酔後のケアには神経を使う。高齢患者が増えている。

高齢者の場合は、骨折し入院しベッドの上で寝たきり一週間といった状態が続くと、ボケの症状が出やすい。その看護は並たいていではない。なかには三十年近く寝たきりで、家庭での看護も限界になり入院してきた患者もいる。かすかに手が動くだけ、他に動くのは頭だけで、ブザーも頭で押す。全面介助が必要だ。

しかし、整形外科病棟はどこか明るい。内蔵疾患はほとんどないから食事ときも活発だし、みな退院のときを待ち兼ねてはいるものの、気分は滅入ってはいない。

ただ、歩行器や車椅子など、器具が多く、ただでさえ狭い病室がゴタゴタし、介助もやりにくい。車椅子の患者を介助しつつ入れられるゆったりしたトイレもなかなか望めない。

浴室の設備もそうだ。入る方も入れる方も大仕事になって、患者は遠慮してしまふ。

「準夜日勤という勤務があるんですよ。そんな日の私の一日、スケッチしてみましようね」

思わず私も身構えた。準夜日勤とはどんなものか。

「準夜は午後四時からですね。深夜勤に引きついでいったん帰宅、翌朝八時半から午後四時半の日勤につくんです。これは相当キツイですよ。

朝はいつも通りに起きて、子どもと夫を送り出しますね。いまは子どもが成長しましたから、かなりラクになりましたけど、小さいときは、保育所へ連れて行つて。そのあとずっと家の中の掃除、ちょっとした用足し。あっという間に昼ですよ。子どもたちと夫のための夕食の支度にかかって、三時半には家を出ます。子どもを保育所に連れてゆくためにクルマの運転練習しました。いまはクルマで出勤です。クルマがなかったら、この仕事動まらないんじゃないかと思ったりします。

それはともかく、病棟に入って引き継ぎがあって、四時半から食事の介助になります。五十三人分を三人の準夜勤務のメンバーが配って、手の使えない人には食べさせ、状態を看ながら声かけしながら、食後のクスリを配ったり、のませてあげたりします。

それと自分の夜勤食を食べます。一汁一菜でいどですね。

さっとすませて明日の採血の準備や点滴の準備にかかります。ブザーが鳴ればすぐベッドサイドに。七時

には検温。カルテに記入。八時半ころまでは、あつという間に過ぎてますね。このあとモーニングケアにかかります。モーニングケアというのは、患者さんが寝る前にのむクスリを渡したり、口をすすぐ手伝いをしたり、顔を拭いてあげたりね。痛みどめをすることも多いですね。

九時には消灯、寝る時間に入りますが、寝られない人はたくさんいます。話をきいてあげることも大切な大切な仕事です。

整形病棟の患者さんは装具をいろいろつけてますので、寝るときははずす介助が必要です。神経マヒの患者さんも多いです。枕をあてたりするだけなんですけど、ほんとにやっつてゐることは誰にでもできる。高度でも何でもない介護看護なんですけど、安楽にしてあげるために、手もかかるし、心も使います。

ナースステーションに戻るのは十時ぐらいでしょうか。戻るとすぐカルテに記録をします。十一時半に最終の巡視をしますが、消灯後の巡視は二回あります。

十二時から深夜勤の人に申し送りをして、これで準夜は終わるのですが、時間のたつの早いこと。夜食をもらって、着がえして、病院を出るのが一時。帰宅して一時半です。

夫はおフロわかしめて待っててくれます。夜中に帰ってからわかすとボイラーの音がボンとして、ご近所に悪いでしょ。

常日ごろ、ご近所つきあいが悪い看護婦ぐらしですから、気を使ってます。おフロに入ってからだをあためて寝るのが二時過ぎ。翌日、日勤ですから起きるのが六時半でしょ。うとうととしたらもう起きて、ボーンとしてますね。とてもとても、子どものお弁当なんかつくれません。おカネ渡して、「パン買ってよね」準夜日勤とは結局四時間睡眠つきの二日連続勤務ということだ。

夜勤は準夜、深夜計八―九回。一人欠員が出たら十回―十一回になる。これでもいい方で、ひどいところは十七回もある。十三回なんてザラ。

もう、四十歳を過ぎて病棟勤務で深夜勤務やら準夜日勤なんかをスイスイこなせといわれても、自信ありませんね。五十歳になったらもうダメでしょうね。

一生懸命やってるつもりでも、夜勤のときはあの細かいアンプルの字、読めませんものね。こわくなります。何回も何回も見なおしてたしかめて、ウロウロして。ひとつ仕事を終えたとボンヤリしてしまう。

若い働きざかりの正看から見たら、何てダメな看護婦だろう、だから準夜なんて役に立たないと思うでしょうね。ナサケなくなるの。なかにはやさしい若い看護婦もいて、夜勤ですけど大丈夫ですか。なんて、いたわってくれるの。肩身が狭いですよ」

(この項つづく)

## 乳がんを経験した方に

### ——アンケートのお願い



増田さんの「看護婦—光と影」は、看護婦さんの労働条件だけでなく、女子労働の問題点を照らし出すとともに、医療や高齢化社会の問題にも、鋭く迫るシリーズです。

へあこら、女のからだを考える会では、こうした問題提起を受けて、手はじめに「乳がん」についてのアンケート調査を始めました。知り合いに経験者がおいででしたら、アンケートにぜひご協力をお願いしたいと思います。

返信用封筒とともに必要部数をお送りしますのでハガキでご返送ください。

〒160 東京都新宿区新宿1の9の6

へあこら 女のからだを考える会

固定観念を抱いて安心する癖があるらしい。日本人についてばかりではなく、

世界のさまざまな国民や民族のあいだで、互いにエスニック・ジョークというレッテル張りが楽しまれてきた。ユダヤ人は欲張りであり、ポーランド人はお人好しであり、イタリア人はいつも女性を口説いているし、ドイツ人は数字と規則しか信じないなどというのは、その典型的なものだろう

ところで日本人に張られてきたレッテルである。「眼鏡をかけてカメラを肩にして猫背の観光客を見たら日本人だと思え」「演説や挨拶をするとき、アメリカ人はまずジョークで始めるが、日本人はおわびと弁解で始める」

「西洋の文化は罪を基盤とする文化だが、日本人の行動の規範は他人に対する恥の感覚である」のように長らく語り継がれてきた先入観もあれば「わけのわからない微笑を浮かべて不気味な国民」という非難、「感情的でヒステリカルに行動する」という悪口に至るまで種々さまざまある。「しかも困ったことに、そうした事実が変わったのちに、イメージはひとつの固定観念として、ひとり歩きすることが多い」との指摘も山崎氏は忘れない。

このようにひとつの面だけが誇張されひとり歩きすることは、言い当てている面がないわけではないだけに、自分で考えるのが面倒で他人に決めてもらいたい一般大衆の心のヒダにやすやすと入り込んでしまう。しかも情報氾濫の今日、誰もがいっばしの評論家を気取れる。でも、もっと正直に自分の皮膚感覚でうなずけるまでは、もっともらしいことも保留して？マークランプを灯していたい。そうすると、本当に悟ることは驚くほど少ないし、納得のいかないことばかりが横行しているナと気づく。で、私はいつも、みすばらしく・堂々と肩をこらしながら怒っている。

もっと、世界の中の日本を考える視線が欲しい。「国際貢献」が葵の印籠になってしまう日本人の発想こそ危険だ。いかに誘導の妙があるにしても、突き抜けて見抜ける力を養いたい。

エスニック・ジョーク《Ethnic Joke》

奥川 睦

言葉は面白い。本来、プラスもマイナスもないニュートラルなものが、何かのキッカケで片方だけが強調されたり、誇張されたりして独特のニュアンスを持ってしまう。

いつも使っている自分の国の言葉でも、ボツとしていたり、古い・ダサイと子どもたちの反撃をくらう。「それどういうニュアンス？」と説明を求めても、よけいにウットウシがられてしまう日常を私も過ごしている。まして外国語になると辞書の教えてくれることで、ひとまず足れりとするしかない。隔靴搔痒の感のぬぐえぬところだ。

前置きが長くなったが、前回とりあげたエスノセントリズムだって、いつ綱引きのバランスがあつという間にくずれないとも限らない。とっくに変わっていたり、変わりつつある含みに手が届いていないだけかもしれないのだ。

そういう怖さへの自戒をこめ、関連語を取り挙げてみた。

エスニック・ジョーク。と聞いて何を連想されるだろう。どういう例を思い描かれるだろう。民族をひとくくりにした冗談だから、良いのも悪いのも有って当然なのだが、この語は、もっぱら低級なヤジのイメージで、高級な文化論の対極に位置付けられている。

これとて、言葉自体はマイナス・オンリーではないはずだ。でも言葉は常に、文化や歴史や生活に裏打ちされている。それらと無関係では存在しえない。身びいきが昂じると相手をフェアに褒めることは難しくなる。異なった習慣が理解できない時、人は容易に不気味さに走り、偏見の温床となる。その危険はエスノセントリズムでも述べたとおりだ。理解の届かない生活習慣や考え方の違いに対する違和感を口に出したらエスニック・ジョークになる、とでも説明しておこう。

山崎正和氏は『日本文化と個人主義』（中央公論社）でこれに触れている。「どうやら、人間には誰しも他国の文化や他民族の民族性について、安易な

## あこら読書室

平等のセカンドステージへ  
—働く女たちがめざすもの—

大脇雅子著

学陽書房

解雇撤回闘争……そこに関わる人たちの生活と心を温かくとらえた各章を読み進むうちに、私は、ああ、これだったのだ、と思いました。

二十年前、私は女子三十歳定年制で解雇され裁判闘争をしました。単組や関連組合の幅広い支援もあり、恵まれた闘いだっただけですが、それでも当事者にしかわからない痛みもありました。

大脇先生は弁護団のお一人でしたが、そんな時お会いしてにやかな明るいお顔を見ていると不思議に気持ちが落ちついたものでした。あの安心感人間を肯定的にとらえるこの視点からくるものだったのでしょうか。

平等は、女性が男性に追いつき追いつくことではなく、より人間的な基準

を作り出しつつ共生していくこと（はしがきより）との観点から、この本の後半では「雇用機会均等法」が生み出した新たな巧妙な差別の実態、派遣社員の問題、セクシャルハラスメント等々、九〇年代後半の女性労働の問題点を解明し、真の平等実現への段階を、アフアーマティブアクション（積極的平等推進施策）の導入を含めて提言されており、国会議員としての活動の方向も示唆しておられます。

大脇先生が言われた言葉で印象に残っていることがあります。「家事、育児はハンディではない。私は勉強がしなかったから男性がお酒を飲んでいる間に勉強をした。目指すものがある時は幸せ」。

職業と家庭と地域の生活を丸ごと生きてこそ人として生きることだから、それを支えるシステムを自分に汗して

著者の大脇雅子さんは「護憲」「法の下での平等」の信念に基づき、女性労働事件を中心に弁護士として三十年にわたって活動。今夏の総選挙では参議院議員に当選、社会党・護憲共同会派に属し、法律家としての目で見据えた国会活動を展開中。長年にわたる「あこら」の会員。

第一章「女たちの裁判」——過労で倒れた看護婦の労災認定の闘い、女子社員の家族手当差別裁判、パートタイム——



創り出さなければならぬ（はしきより）。この本が発する問題提起は、受け取る立場の違いを越えて明日へのエネルギーを沸き立たせてくれるはずです。

四六／274ページ／一九〇〇円

（清水陸子）

## モノと女性の戦後史

天野正子・桜井 厚著

有信堂高文社

タイトルのごとく「モノとそれを使うヒト、とりわけ女性との、相互のはたらきかけのダイナミックな過程を追いかけて、あとづけていくなかで、『昭和』、とりわけ『戦後』という時代のなにか、どのようにみえてくるのか」。そんなテーマのもと、著者天野正子さんは楽しみながら膨大な資料を検証する作業を行っている。桜井厚さんとい

う良きパートナーとともに。

モノ、無機質な、表情を欠いたそれが、実は使うヒトの意識の下にひそんでいる感性をゆり動かし、生活パターンを変え、新しい生活の様式を生み出していく。本書はそのモノを選ぶ基準として、自分と身体の関係に大きな影響を与えるモノ―身体性―として、パンスト、下着、ナプキン、避妊具、次に家庭の領域に直接はたらきかけ日常を変容させていくモノ―家庭性―として、洗濯機、流し、トイレ、そして女性をより広い「社会」に結びつける役割のモノ―社会性―として、手帳、タバコについて考察している。

それぞれのモノの歴史を具体的にひもとくとき、文献から様々な側面で考察し、昭和、特に戦後期に進んだ生活革命が、女性の生活世界にどのような変化をもたらしたかを明らかにする。たとえば

生活用品、アンネ・ナプキンの初登場は、日清戦争以来、脱脂綿をモッコふんどのなどの黒い月経帯にあてて処理してきた不便さや不快さを解消した。一方、意識面では戦後、それまでタブーとされ語られなかった生理帯などの工夫が婦人雑誌でオープンに語られ始め、「女の身だしなみ」から健康的で活動的な「文化」の問題としてとらえられるにしたがって、女性の生き方の積極的・肯定的変化をもたらしたと言える。「モノと、女性の交渉がつくる戦後史は、理念やイデオロギー中心の、女性（解放）運動史とは、ひと味もふた味もちがった『戦後』になるのではないか」という著者のもくろみは見事に成功している。

（下村 美恵子）

B6／260ページ／二四七二円

## 上野千鶴子なんか

こわくない

上原 隆著

毎日新聞社

「かつてこれほど正直にフェミニズムとかかわった男はいない」と帯に言う  
とおり、素直な感性がなかなか良い。  
「こんな良い男なら……」と私も読みながらしみじみ思ったものだ。私の夫にも他人（ひと）はそう言うのかもしれない。

一年ほどあまり物を言っていない、  
そろそろ何か言わないと、と話しかけて返ってきた妻からの「別に暮らしたい」。のっけから刺激的で、そう言われた若者の心理的パニックが気どらず語られている。

配偶者Rさんの読む上野千鶴子を検証しながら、言葉にならないRの不満

の手ざわりを自分の実感できる範囲に  
たくり寄せようとの努力が始まる。

だから上野ファンも、おさらいをかねて「マルクス主義フェミニズム」だとか「構造主義」「決定論」「脱中心化」「生産・再生産」などの言葉をた

どっていくことができる。なるほどこれなら分かる、分かる……という感じで。

中野翠と上野千鶴子の比較も試みる。

二人の文章を縦横に切り、架空のインタビューまで造ってしまう。六〇年代後半の学生運動を体験した二人だが、

中野は「ありうべき自分よりもそのま

まの自分を肯定」する「……である」命

題に自分を絞ってゆき、「私」を起点

にしてしか発言しないと決めたのだと

結論する。この態度を、上原氏は「娯

楽」と名付け、「意図は正しくても、

カッコ悪いものはイヤ」と説明、「政

治」Ⅱ「……ねばならない」命題Ⅱ客観

的に社会はこうなっていて、その知識から判断し、あなたはこう行動しななければならない、と対立させる。一方上野は、自分の意見は言わず、事実をして「……ねばならない」命題を語らしめる態度だ。

二人とも、多くの「弱い女」ではなく、少数の強い女の中に入るといふ点では自覚的である。だから中野は「女は弱者だ」の論調には嘘っぽさを感じて口をつぐむ。なのに上野は嘘っぽいと思わず主張できる。それは、上野が「感情と事実を分け、事実の方に自分の意見の根拠を置いている」からだ、と、二人の差を納得する。

この本の面白いところは、中野の実感を説明するくだりで「焼肉定食を食べて満腹の時『世界には〇〇万人もの飢えた人々がいる』と言った時のように嘘っぽい気持ちになる。中野はそれ

に耐えられない」という風な説明の仕方だ。性支配そのものはそもそもなぜ発生したのか？ を、水田珠枝著『女性解放思想の歩み』（岩波書店）を用いたり、『平日の妻と夫の生活時間・家事の負担量・金銭（月額）で見る妻と夫の労働量』などの表を独自に造り、毎月の家事労働支払い分三十万をもし妻が金銭で得ていたら、夫はエラソーな態度はとらないだろうと、「夫による妻の労働の収奪がある」ことにより、「実感」や「気持ち」や「感情」ではなく、「物質的基礎のところを変えなければ、女性抑圧の文化は変わらない」と考える上野さんを支持するRさんの思いに手を屈かせようとす。ほぼ出尽くした議論ではなく、矛盾をいっぱい抱えたままの日常の中で、どう男と女は向き合い・話し合い・助け合い・分かれ合い・違いを認め尊重

し合えるのか。フェミニズムに対する私の興味もその辺にある。願わくば夫という鏡に写ったR像がRさんご自身とどう違い、どう噛み合わないのかの实感を、妻の側の本音として語ってほしい。

（奥川）

四六／245ページ／一五〇〇円

お言葉を返すようですが…

―肝っ玉母さんと

呼ばれて三五年

中山恵子著

中央出版

寿司屋の娘だった著者、中山恵子さんは、父親の反対を押しきって大学に入る。卒業後中学校教員になる傍ら、婦人問題のサークル活動をしていた。結婚後も家業を手伝いながら仕事を続け、十二年間の教員生活のあと、名古

屋市教育委員会の社会主事へと転進、以後、行政の中で、婦人教育の仕事にたずさわり、目ざましく活躍し、女性初の婦人問題担当室長、国際課長を経て、名古屋国際センターの事務局長に外向する。定年後は、〈市民ネットワークセンター・なごや〉事務局長をつとめつつ、老人問題の施設の確立を求めて、草の根グループとして活動している。

本書は五章からなり、著者のこれまで歩いてきた記録と、グループ活動の成果や仕事の業績が綴られている。巻末には、「戦後愛知女性史年表―明日を生きるために―」として、名古屋市の行政と、私たちのグループのつながりの資料が載せられている。

（杉本恵子）

B6／265ページ／二二〇〇円

## 女性史入門

伊藤康子著

ドメス出版

筆者は生い立ちや学習歴を、女性史に絡ませながら説明する。戦後の女性の自立の過程をわかりやすく表現していて、今の自分とおもわず対比させてしまう。

第一章私の女性史学はじめ、第二章日本女性史研究のあゆみ、第三章地域女性史の意味、第四章女性史教育の実際、第五章女性史学への道、第六章女性史学への期待の六項目にわたって書かれている。

なぜ女性史を学ぶのかと思う人は、本書を読み進むうちに、考えもしなかった事が女性史に関わっていたと気づき、今まで疑問に思っていた事が個人のレベルをこえたものであると理解で

きる。

女性問題を考えたこともない人、女性問題に気がついた人、に恰好の手引き書。資料も多く掲載されている。

(常陸 薫)

B6/204ページ/五〇〇円

ライターをめざした

私たちの軌跡

ヘウイン女性企画

ライター集団著

ウイン女性企画出版

ライター実戦講座の記録が出版された。受講生が最初に書いた文を添削し、経過を公表。ライターたちの「恥」を公開してある。

野寺夕子講師の的確な添削も、読者に納得させる力がある。

・誰でも表現してしまいたいような、それ

でいて指摘されなければ気がつかない文章

・適切でない言葉の直し方

・簡潔に表現する方法

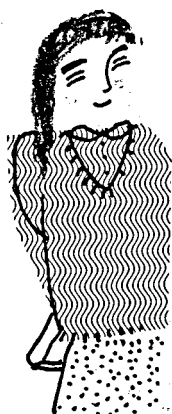
など、文を書く時のノウハウが随所に光る。少しの表現の違いで文の品格が変わる理由がわかりやすい。

受講生も野寺講師も、本にまとめ、公表するとはまったく考えず、取材に行き、文を書き添削をすすめた。ピュアな感覚が行間感じられる。野寺夕子講師の生きる姿勢と受講生の感性とが共鳴している。

添削する軌跡が公表されるのはめずらしいと好評である。

(常陸 薫)

B6/204ページ/一八五四円



会と催し

★パレスチナ、インティファダ世代

サブリーンのコンサートを聞く

SABRIN

# 抵抗の思いを アラブの音とリズムに のせて

## صابرين



さる十二月、エルサレムからサブリーンのというバンドが来日し、京都と東京で計三回にわたってコンサートを行いました。これはパレスチナ出身の映画監督ミッシェル・クレイフィ氏の映画上映と併せ、「豊かな記憶—パレスチナ・インティファダ世代の、音と映像」と銘うった企画の一環として実現されたものです。この企画の目的は、パレスチナの若い世代の内て胎動する新しい文化創造の試みに直接触れることによって、その土壌である生きたパレスチナの現実と、原動力である新しい思考の潮流とを探ることにありました。サブリーンは一九八〇年にエルサレムで結成されたグループで、現在に至るまで幾多のメンバー交代と、音楽性の変容を繰り返して

きました。もともとは西洋の音楽、ロックやポップスが好  
きでバンドを始めた彼らは、いつしかそのような音楽と自  
分たちの内面世界とのギャップに気づき、それまで使って  
いたエレキギターやドラム、キーボードなどを、カーノー  
ン、ウード、ブズクといったアラブの楽器に持ち替えるよ  
うになりました。このアラブ伝統音楽への回帰の時代を振  
り返って、サブリーン結成当初からのメンバーの一人で  
あるサイード氏は、当時アラブ民族主義という政治概念の  
影響が大であったことを認めています。

八〇年代にパレスチナの歴史は大きな転換期を迎えまし  
た。占領下のパレスチナ人の内部から抵抗の気運が生まれ  
たのです。それまで一部の人間が担っていた抵抗運動が大  
衆の生きる営みと結びつき、インティファダに向けて歴  
史が大きく動き出しました。この新しい動きに直面したサ  
ーブリーンは、自分たちの音楽もまた、新たな地平に向け  
て歩み出さねばならないことを確信します。そこで彼らは  
自分たちのルーツであるアラブ音楽に世界の様々な音楽の  
要素を取り入れた融合音楽、すなわちワールド・ミュージ  
ックの創造へと向かい始めました。

これはひじょうに厳しい選択です。いかにして自分たち

の音楽的源泉を見失うことなく多様な音楽を融合させるの  
か、その中からいかにして寄せ集めでも借り物でもないサ  
ーブリーン独自の音楽を作り出すのか。我々がサブリー  
ンの音楽に触れるとき、暗中模索しつつもこれらの難しい  
問題に対する回答を見いだそうとする彼らの誠実な姿勢を  
感じる事ができます。

この困難な道のりを支えているのは「自分たちをとりま  
く日々変わりゆく現実と、その中で生きる人間の感情を音  
楽で表現し、伝えたい」という意志と、「他者への依存を  
捨て去り、自分自身の力で、状況を変えていかねばならな  
い」という信念だということを、今回彼らとの対話の中か  
ら知ることができました。

このふたつの言葉は、メンバーのひとりが次のように説  
明してくれた、インティファダを支える新しい世代の冷  
徹かつ柔軟な精神から発せられたものだと言えるでしょう。  
「自分たちは古い世代と違って、過去を冷静に振り返り、  
どこが間違っていたのか、どこをどう変えていけばいいの  
かを考えることができる。またメディアの発達によって世  
界の情勢に触れられるようになったため、広い視野を持つ  
ことができる」

もちろんサーブリン一個をもってインティファダ世代の代表とすることは浅薄にすぎるでしょう。また彼らの活動の中心地であるエルサレムにおいてさえも、彼らが広く大衆的な支持を得ているとは言えないことも事実です。

しかし他の音楽グループとの連携、映画や演劇の音楽担当、また現在彼らが力を入れている占領地の子どもたちへの音楽教育などの多岐にわたる活動を通じて、同じ精神を共有する仲間が集まり、育ち、新たな文化創造、ひいては思考の潮流を形作りつつあることは確かでしょう。

パレスチナの状況は変わってゆきます。人々の意識も変わってゆきます。それにつれてサーブリンの音楽も確実に変わってゆくはずです。今回の企画はその通過点を確認したにすぎませんが、これによってパレスチナの文化に興味を抱き、その展開を長い目で見守っていくという人々が多少なりとも出てきたということが大切なのだと思います。なおサーブリンのCD「預言者の死」が各レコード店で販売されます。サーブリンの音楽をまだお聞きになっていない方、ぜひお買い求め下さい。

文・山本かおる  
写真・古居みずえ



## ■西部生協二十周年記念

### 「高橋ますみ講演会」を聞いて

昨年十一月、西部生協は設立二十周年記念行事として福岡市の大手門会館に高橋ますみさんを招いて講演会を開き、約五百人が集まった。

高橋さんの講演を聞いたのは二回目である。最初は六年前、十年間住みなれた名古屋を離れ福岡に来たばかりの頃で、お話のなかに出てくる女性たちや街の名前に、懐かしさで胸がいっぱいになったことを覚えている。その時も今回と同じく東海BOCの女性の手によるファッションを身につけておられた。その後女性誌にも頻繁に登場し、私もおくれればながら高橋さんの本を友人に見せたりして当地での女性の輪を広げていった。生協活動も、その輪のひとつである。

今回の講演は専業主婦が大部分を占めている生協組合員が対象のせい、主婦の立場でやれるお金の稼ぎ方や社会活動をさまざまな例を挙げて話してくれた。たとえば「知って得する離婚講座」人に好印象を与える為の「人は見えてくれ講座」など、企業や自治体が考えもつかない講座を企

画し、採算割れしないように報道関係に宣伝したりチケットを売ったりすることで、経済的自立の厳しさと共に自分で金を得る喜びを実感したこと。本格的に仕事を始めた人には皆でさりげなくフォローしたこと。また、高橋さんの多岐にわたる活動の一環として、草の根の市民の国際交流は、主義主張を越えて人間と人間の出会いでありたいと、一九八九年にベトナムにミシンを八百台届けたことにも触れた。

社会的な意義のあることを思いついたり、自己実現の道を夢みる人は結構いるが、それを実行にまで移す人は今の時代にも多くはいない。まして、高橋さんは、初めは転動族の妻であり、乳幼児を抱えた母、そして講演の中ではあまり触れられなかったが、病気がちの姑の看護をする嫁でもあるという多忙な生活の連続で、その真つ最中から自分の自由になる金を稼ぐ第一歩を踏み出している。その原動力は一体どこから来ているのだろうか。私なりに解釈するとそれは姑との葛藤の中から芽生えたものではなかったか。姑の毒舌に傷つく話がよく耳にするが、彼女の場合はちょっとすごい。寝込んだときに投げつけられた言葉、「馬や牛なら売り飛ばしも、つぶしもできるが嫁の弱いのはどう



にもならん」。高橋さんはこれを個人的な恨みとせず、女性問題の課題として受け止め、自ら稼いだお金で女性学を深め、ネットワークを広げていった。高橋さんの内なるフェミニズムを開花させたきっかけが姑の存在であったというのがなんともおもしろい。

最後に、新しく出た本『自立の夢をかたちに』の中で高橋さんは私に次のように語りかけてくれているように思う。自己実現の道を阻んでいる一番大きい障害は、あなた自身の自己拘束意識ですよ、と。

(工藤僚子)

### 原稿募集

各地の集会の模様(会と催し)、テレビ、ラジオ、新聞雑誌などについて感じたこと(テレビから/新聞雑誌から)本の紹介(あこら読書室)の原稿を常時、募集しています。

そのほか、研究論文、随想、情報、そのほか何でも送り先はへあこらへ。

お礼として掲載誌を十部お送りします。

# 月刊ほん・コミニケート

## 地球と未来にやさしい本と雑誌の情報誌

【見本誌進呈します】

■月刊 ほん・コミニケート は少数出版物の情報誌です。新刊情報、書評・紹介、本の周辺情報、入手困難なパンフレットや自主出版物などを掲載しています。

■掲載した本はほん・コミニ社に注文できます。

B5判・16ページ 1部300円 年間購読料3600円  
(年間購読料は送料・「目録」込み)

地球と未来にやさしい本と雑誌

ほん・コミニケート  
取扱い出版物目録(93年度版)

<特集> ブックパノラマ あじあ

■政治・経済・文化から衣食住まで、何でもありの、アジア国別ブックリスト。約400冊の情報を掲載。

●B5判/80頁 定価650円+税



定期購読・目録の購入は  
ほん・コミニケート  
編集室へ

〒169 東京都新宿区百人町1-15-24

OSセンター210号

Tel. 03-3368-4160

Fax. 03-3360-2824

郵便振替 東京 1-398142

テーマで選ぶほん・コミニ目録第2弾  
猫もシャクシも 寝ても覚めても  
**エコロジー**

■エコロジー関連書籍を内容紹介付きで、一冊に200冊紹介しています。「毒入り」書評、コラムが好評です。充実のブックガイド。

●B5判/32頁 定価300円+税

一九九二年十一月十六日付け

『タイム』より

一九九二年の選挙で女性は何を祝うべきか。

男性が上院の議席をほぼ占領しているが、女性も以前よりは強い政治的勢力となる

バーバラ・エランレイク

橋口三保子訳

生物学よりも配管工事のほうが必要らしい。女性が参政権を得てから七十年以上経つというのに、上院には女性用のトイレが無いのだから。下院の民主党控室ですら女性用トイレは設けられておらず、女性議員は女性議員用読書室まで歩いていく。そこも全部で三つしかない。未来の考古学者は連邦議会の配管や水洗設備を調べて、二十世紀後半の米国はサウジアラビアと肩を並べる父権政治社会であったと、結論をだすかもしれない。

この結論は間違いといえよう。フェミニストの団体や雑誌、支援グループ、宣伝用のTシャツの数で言えば、米国は国際的なフェミニストたちが策略をめぐらす世界的な中心地である。ところが、この「草の根」エネルギーと行動は強力な政治勢力となっていない。一九九二年は婦人年であるが、女性議員の数は上院一三%、下院一六%である。この率は多くのヨーロッパ諸国より、大幅に後退している。婦人年だからという騒ぎにはいくらかの脅威が感じられない。つまり「これが女性のラストチャンス、機会は二度とない」という響きがある。

だが一九九二年は女性が連邦議会を突撃した年として、女性史に残るだろう。

百十七人もの女性が上院と下院の議席を狙って、立候補した。これは一九九〇年の七十七人をはるかに上回っている。また今回はじめて二十一一人もの女性が立候補しており、一九九〇年の十四人より数が増えた。

ここ何年もフェミニズムは死んだという記事を書いてきた多くの者にとって、婦人年は思いがけない驚きとなったに違いない。一九八〇年代にフェミニズムは、穏やかな物腰でスカートの似合う「ポストフェミニスト」に取って代

わられた感がある。彼女たちの頼りになるベビーシッターと、企業の壁にいどむ機会しか望まなかった。

ところがここ一年で、ある世代の女性は、今まで当然と

Nothing in our  
genes says we have to  
be kinder, gentler  
and more committed  
to passing the  
Family Leave Act

してきた権利も取り上げられるいう可能性に気づき始めた。最高裁判所がロウ・ヴィ・ウエイドでけちをつけたように、「妊娠中絶合法化の選択」は倫理的な緊急性を帯びてきており、それは別世代のヴェトナム用に確保されたものだった。

そして次に「ヒル・トーマス」事件となる。

特に印象的なシーンは、十四人の白人男性が、普通ならホテルのメイドという形でしか会うことのない人種と向かい合ったことだ。女性たちが上院司法委員会を掌握しようと企んでも、全米中の政治的意識はあまり高められることもなかった。

だからポストフェミニズムさようなら、第三の波こんにちは、となったのである（第一の波は参政権運動で、第二の波は一九六〇―七〇年代に始まった）。男物仕立てのスーツを着て会社へ駆け出す女性は、通りでジョギングをしている女性よりはるかに多い。フェミニストたちはニューヨーク市にウイメンズアクションコアリションという戦闘的な行動グループを結成したが、これは騒々しいゲイグループのアクトアップを真似たものである。

民主党大会で女性候補者が着飾ってパレードをしている一方で、何千人もの女性活動家は妊娠中絶合法化に反対するデモ隊と対立したり、女性への暴力反対を叫んで集会をしたり、洒落たピンク色のゲッティングイットガゼットを発行したのであった。

そしてここから得たものはアドレナリンだけではなく、収穫もあった。女性候補のほぼ全員はワシントン出身のパティ・マレイ（ただのテニスママ）も含めて、州議会の議員を既に勤めている。彼女たちの飛躍に必要なものは資金であったが、これは八〇年代を通じて蓄積されていた。ある世代の女性先駆者は仕事のパートナーを見いだし、街角の事務所に移り、小切手に署名をするようになってきた

からである。ヒル・トーマスの後、彼女たちは小切手を素早く書いたわけではなかったようだ。二党の女性党員集会は、一種類の新聞広告から六万千ドルの資金を調達した。それには、クラレンス・トーマスが女性上院議員のパネル



で焼かれるというシーンを描いている。「エミリーズリスト」とは妊娠中絶合法化を支持する民主党側の女性献金者ネットワークであるが、この献金はふだんの四倍、即ち六百万ドルにもなった。したがって、このネットワークは選挙運動のなかでも最大の献金者となったのである。

それにしても、今年が男性の消える年でなかったら、女

性の年とはならなかったかもしれない。一連のキャンペーン騒ぎで議会が不起訴の容疑者用の檻に様変わりした後、男たちは最新の履歴書を手に入れ、素早く逃げ出してしまった。五十三人の下院議員は退職、または立候補を辞退した。ニューヨーク州のステイヴン・ソラツのように、他の男性議員たちは選挙区の再分割により、自分の選挙区を移されてしまい、足もとがおぼつかないはめになっている。一方、選挙区に欠員が出ると、ロス・ペローが行動したように大きな足音を立てて、女性候補が殺到したのだった。

しかし、全女性が、というわけではない。「今年はフェミニスト女性の年です」とアンチフェミニストのフィリス・シュラフリーは辛辣に語った。あるいはリベラルな民主党の女性が、といえる。このため、ブッシュ大統領は二回目のイデベートの折に「たくさん落ちてくれればよいのです」と囁いたという。上院の女性立候補者十一人の内十人は民主党員であり、下院の女性立候補者百六人の内七十人は民主党員であった。

だが婦人問題を買う物袋に山ほど抱えて、女性候補者は民主党以外のどこへいけるだろうか。共和党は家族第一主

義で、中絶とゲイの権利には反対の立場である。民主党は家族の問題即ち、健康、教育、ファミリー・リープ（家族に何か起きた場合、上司に話して職場を離れられる権利）を取り上げている。クリントンとゴアはロースクールで女性と肩を並べ、家庭で本物のフェミニストと暮らす第一世代の大統領候補というのも強みである。このため、二人はブッシュ大統領とは異なった世代である。女性登用の質問を受けた時、ブッシュは現内閣で土産のタイピンを分ける責任しかない女性のことを挙げている。また、ペローはこの質問に際し、妻と「四人の美しい娘」の名を挙げたのであった。

現職離れの傾向が強い一九九二年に、女性候補は従来の性別分担を越えるアピールを行った。女性有権者がそこに「性別分担のモデル」を見いだしたのに対し、男性は「アウトサイダー」を見ている。一般的にみて、女性は男性よりも倫理的だという期待があった。うわべや虚飾にとらわれず、物事をスーバーでの買い物のように現実的にとらえるだろうというわけだ。だがこれは婦人参政論者の夢であった。女性が生得の「母親のセンス」で、煙草の煙でもう

もうとした密室に爽やかさと光をもたらすと思われていたにすぎない。

今夏に短期間ではあるが、わが国の政治は性の政治となつたようだ。共和党には「手作りのお話」から借りてきた演壇があり、マリリン・クエールはキャリアアワイフとしての女性の妊娠中絶選択権を代表することとなった。マリリンはこの草稿と性革命を論争に持ち込んだ時、中絶の選択権が危ういものであることを明らかにした。全面的な文化論争が起こり、それはベビー・ブーム風だった。フェミニズム対アンチフェミニズム、抑制対認可、事態を混乱させるか、壁を強化するか、女性の顔をしたハルマゲドン（善と悪の決戦場）であった。

ところがこの騒ぎの後、論争は長続きしなかった。九月になると、婦人年は八か月で終わりを告げたようにみえる。国が大統領候補者に注目するようになり、政治は鬬鶏の趣をまた帯びるようになった。家庭内暴力のような女性の問題は大統領選挙には現れず、中絶が副大統領候補の討議に挙げられた時、ストックデイル司令官は不機嫌な様子で妊娠中絶合法化支持の立場を切捨て、「これは終わりにして、重要な問題を話そう」と語ったのだから。

一方、女性の選挙運動は弾みがつきだした。フェミニストの資金集めが成功したにも関わらず、多くの女性候補は未だエコノミー・クラスで、百ドルの昼食会が目新しい試みとされ、歯科医を訪問するのは過去のこととされた。カンサス州で、民主党候補グロリア・オデルはたった十ドルしか資金を得られなかったのに対し、現職のボブ・ドールは二百万ドルを得ている。カリフォルニア州のバーバラ・ボクサーとペンシルヴァニア州のリン・イーケルは運動後半に至るまで、対立候補の攻撃的宣伝と戦うにはあまりにも文無しだと痛感したのだった。

さらに認識されたのは、女性候補は自らの手で追い出そうとしている男たちより道徳堅固だとは限らないことだった。イリノイ州のキャロル・モズレイ・ブラウンはメデイケード（州と連邦政府が共同で行う低所得層や身障者のための医療扶助制度）詐欺で攻撃された。母親の老人ホームの費用を賄えるだけの余分所得を申告しなかったのである。イーケルは立候補を宣言した日の夕方、一万七千ドルの税金未納であることが暴露された。

下院議員バーバラ・ボクサーは百四十三枚もの不渡り小切手を出した。この汚い選挙戦のなかで、ニューヨークの

フェミニスト、ジェラルディン・フェラーロとエリザベス・ホルツマンはリベラルな男に道を聞こうと、噛みつき、爪を尖らせた。新しい女性候補者が全てフェミニストというわけではない。共和党候補シャリーリン・ハー（サウス・ダコタ）とリンダ・ビーン（メイン）は誇らかに「妊娠中絶合法化反対と拳銃所持賛成」を宣言した。

おそらくこれが望ましいあり方なのだろう。闘士型女性、右翼の女性、フェミニストの女性——あらゆるタイプの女性が見事な多様性を示しているのだから。結局我々女性の遺伝子には、女性が親切で、優しく、何事も家族の許可を得なければならぬというものはない。しかしわが国の政治では、女性の代表するものは未だに参政権以前のレベルだから多くの新女性候補が我が身を女性の特使であると規定するのも、無理からぬことである。先駆者は特定の立場をとらないわけにはいかないものだ。

当選者がフェミニスト千年祭の到来を告げるというわけにはいかないだろう。クリントン政権なら、妊娠中絶合法化、ファミリー・リープ、胎児組織研究法の成立はいくらか楽に行われるだろう。だが、ワシントンの女性問題政策

調査研究所によると、クリントンの新政策はやっと「B」

の評価である（ブッシュは「D」）。それに新政府の一体化を図るために、新大統領は党内のフェミニスト及びリベラリストとは、距離を置くことになるかもしれない。下院では、女性は今まで取るに足りない委員会に追いやられていたから、女性の新人は底辺から始めることになる。片隅でなんとか口を挟もうとあがきながら。もちろん女性用トイレには、未だ遠い道のりを歩くことだろう。

今回は余りに貧しく、未経験で、若すぎると感じた落選者と女性たちに告げたい。次回の一九九四年は男たちの二一八番目の年であるべきだと、書かれた物があるわけではない。上院及び下院女性新議員がなんとか実績をあげれば、それは全て次の女性候補への信頼性を増すことになる。仮に実績をあげられなかったとしても、それは怒りとなってフェミニストの資源となり、次回ののろしを上げる蓄えとなることだろう。（本稿にはニューヨークのウエンディ・コールとワシントンのジュリー・ジョンズレンのレポートを含む）

## トピックス

### ●女性の離婚事情が悪化する？

日弁連の「女性の地位委員会」がまとめた離婚条件の改善案の中に、従来の

一、配偶者に不貞な行為があったとき。

二、配偶者から悪意で遺棄されたとき。

三、配偶者の生死が三年以上明らかでないとき。

四、配偶者が強度の精神病にかかり回復の見込みがないとき。

五、その他婚姻を継続し難い重大な理由があるとき。

に加え、新たに「配偶者と継続して五年以上共同生活をしていないとき」が付加されることになり、一部の地域では新提案の説明会も始められました。「近く法制審議会にかけられる。そうすると元に戻せない」と、女性弁護士の一部からは心配の声があがっています。実際に扱うケースの多くは、夫が女と家出して……という例が多く、現在の日本では残された妻の側に圧倒的に不利ではないか、時期尚早では、と。

賛否両論を、ぜひご寄稿ください。破綻主義は世界の潮流ですが、現実の対処に関しこの機会に論議をつくしたいものです。〒160新宿区新宿1の9の6 へあこら編集部

## 崩れゆく永久凍土

日本の二十七倍、広い広いシベリア。そこは地球上貴重な森林資源の土地だが、そこに新しい沼が次々に出来ている。

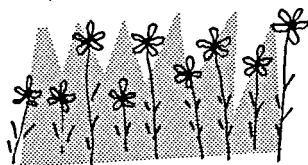
一日二ヘクタールの割で切り倒されていく木々。発注者は日本企業。品質・納期の厳しい発注先の要望に応えるため、奥へ奥へと、見さかいなく伐採が進む。

木の根がえぐられ、深さ十メートルの亀裂があちこちに。その底には水が光る。シベリアの森林は、九七〇万平方メートル、世界の森林の四分の一。地球温暖化の原因となる二酸化炭素を吸収する上で、アマゾン以上の働きをしていたが、去年一年で四万平方メートル、東京都の二十倍が荒地となった。

亀裂の底に光る水は、氷河。水中の枯葉は地下にあれば無害だが、空気にふれるとメタンを発生、環境破壊の最有害物質の一つとなる。

毎週一回、五万本、二九五平方メートルのイカダが、ナホトカまでアムール河を延々と下る。日本の商社十七社

## テレビから



が、六六〇万平方メートルを五年間契約で買付けている。マスメディアでなければできない取材、見事な映像。さすがNHKスペシャル。(さ)

### ことばは変わる

毎週金曜夜十一時から三十分、NHK教育のこの番組をいつも楽しみにしている。「日本語」に関心が深いためだが、内容は移り行く世相を、一つのアングルから照射していて、現代社会史としても興味深い。その一つ二つを最近の例から――。

「平らなアクセントがなぜはやる」

近頃の若者は、アクセントが平板になっている……という実例をキャンパスや街角から拾った実例はなまなましく、ショックを受けた。続けて何人もの発言を聞くと、

まるでロボット、機械の声そっくり。若者語の平板化は、例の「別に……」あたりから始まったような気がするが、聞いていると、すべての話が「別に……」調で、まるで無感動



な感じ。「こうした、特殊なイントネーションで、一種の『仲間づくり』、身内意識を築いていく」といった解説だった（ように思う）が、言われてみると、私の記憶するかぎりでは、著しい平板化としては、電算室の仲間ことばがあったような気がする。「コード」（code）「メモリ」（memory）を、全く平板に発音したテープほどきに苦労した三十年前を思い出す。「メモリ」を平板に発音すると「目盛り」と聞こえたことも……。当時の電算室は各社選りすぐりのエリートぞろい、で、「こういう発音で、一種の『特殊部落』を形成するのかな」と、妙に感心したが、それと、今の学生ことばは共通項があるのかなのか。考えてみると、放送現場でも「音楽」は平板に発音していたが、それは今も続いているのだろうか。

### 「見れる・見られる」

最近ほとんど一般化した「見れる」がかねがね気になっていたが、永六輔氏が、例の早口で「見れる」を勢よく告発。ついでにNHKの女性アナウンサーの、「この件について専門の学者に聞きに行きました」というコメントの敬語表現についても異議申立て。

二つとも、私は全く同感で、パチパチ手を叩きたいくらいだったが、専門家の柴田武史氏は、「『見れる』は、い

ずれ変わっていく変化。七十年間、『見られる』を使い続けてきた私は、終生『見られる』と言いつけるが、『見れる』が一般化するのとは時間の問題」と、あっさり。学生時代の国文法の時間、老師が繰り返し「ことばは変わるもの」と教えて下さったことを思い出した。

これと直接の関係はないが、当用漢字からはみ出した語句、たとえば「椅子」は、今では「イス」とカタカナ表記にするのが普通になっている。新聞の紙面などで見かける度に、今の若い人は外来語と思うのではないか、と思ったりする。たしかにことばは変わって当然だが、近頃の変わり方の早さ、特定の年代や特定の集団の「特殊語」の多さが、心の奥になにがしかの抵抗感を生むのかもしれない。

戦中派世代の私は、Aと発信したつもりの自分のことばが、若い人にBと受けとめられてショックを感じることも時々あるが、さりげなく使ってしまう『現代古代語』には、これからは注釈をつけなくては、と考えこんだ。（千）



「花の乱」だより二六号 補遺

一九九三年、斎藤千代さんは恐ろしい  
ようなタノシミなようなと言われますが  
、「女の時代」イコール大正デモクラシ  
ーとならないようにしなくては。

私はまず「花の乱」―出版社・新評論  
にたいする解雇撤回・原職復帰を求める  
裁判です。地裁・高裁で敗訴でしたが、  
現在、最高裁に上告中。

新評論において、私に即日解雇を申渡  
した藤原良雄氏（現在は藤原書店社長）  
が脚光を浴びている今、「花の乱」も目  
立たせなくてわね。

片岡 陽子

謹賀新年

一九九三年 元旦

これ以上 平和憲法も死に違  
やうなために 逆転も夢見  
てがんばるつきやない どうぞ  
今年も元氣をください



船橋市西船一四一十一六二  
島田 信子  
〒273 電話〇四七四三三二五八二

迎春

1993

世相の安泰に用うこと、めを親にたは、名開校、おす祝脈の  
笑待、そくに於て陣、千生、余やとや。さて四、世ながらは己が  
老健生、か、余生た、ら、た虎の守、如何に喜心。―いまはむかし  
子、た、えの機、生、住、明、自、に、續、着、を、一、賓、越、し、入、金、は、便、は、ね、エ、ド、と  
咲、呵、呵、て、酒、飲、ぶ。も、目、暮、ら、に、も、无、足、あり、を、う、し、の、  
人、を、き、い、ず、れ、に、そ、も、古、餅、を、た、り、たり、は、還、ま、な、ら、は、近、こ、ろ  
歳、七、餅、は、時、や、ら、も、あ、て、に、も、し、は、と、ね、は、こ、み、す。何、年、  
一、の、二、健、勝、は、盛、す、祈、念、し、示、来、喜、を、臨、新、を、願、う、げ、す。

元旦

岡田 伸太郎とまき子  
横浜市加納五七〇一 〇三二二一六三八

〒363

輝く新春

お日様どう

ぶいす

平成五年 元旦

無60 和歌山市美町六一五二一

子

ワめおもて 鶴りありの山 本 ま き  
御、まに、ウ、ク、と、ま、い、な、ら、電、話、(〇五五)五五二一六五四九番  
御、話、不、行、か、ま、り、に、つ、ま、ま、ま、あ、い、て、す  
どうも お元日





新年おめでとうございます

92年 は、ウラシオア、アト、ウ市、女社、会議訪問、全國女社史  
研究交流のついで、沖繩へと、新しい体験とシロギと  
受け、二年目と(細)て、女社セラーの市川房枝  
生誕100年展は、感得深いものがありまし。  
93年、やはり、新潟女社史と、女社セラーのことと  
考えて、いまひとと、ひと、いま、いま、  
一九九三年、計表

一九九三年 彭春

新子市小針子西五(今九五。一三)  
倉元正子

明けましておめでとうございます

本年もよろしく  
お願い申し上げます

自然分娩方法は、ヨガ・気功・イメジャリー・ソフロジョ・水出産と多彩になりましたが、その所は一つ、産む人周囲の  
 人皆満足のお産で、生き生きした赤ちゃんを迎えることと存じます。  
 一九九一年に「お産の学校」で開催したバネルデイスカッシュヨ  
 は、「一九九一年に『お産の学校』と合同で、日本助産学会学術集  
 プレコングレス・ミーティングとして定着することになりました。今  
 イマは「よりよい娩出期のケア」で、三月六日に北九州市で行いま  
 数に別れて話し合おうかたで、昨秋来日されたオランダ博士の  
 好個の話題かと存じます。ご来賓をお待ちしております。

一九九三年 元日

千一六九 東京都新宿区高田馬場一―二四―八

2011-11-11-0006

お産の学校運営委員会  
(有) 芳心社 杉山次子



謹んで新春の  
お慶びを申し上げます

平素の御厚情を深謝し益々の御発展を祈ります  
本年も相変りませず御引立ての程  
宜敷くお願い申し上げます

1993年 元旦



株式会社 アイ・コーポレーション

代表取締役 石川 由 紀

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目10番7号  
グロリア宮益坂III 604号室  
TEL 03(5485)5212 FAX 03(3486)9040  
(自宅) 東京都世田谷区上野毛4-19-12

迎春

平成五年  
元旦

三 浦 文 子  
〒459 名古屋市長区大高町伊賀殿一〇七

ご活躍を、日感敬一に、かう、読ませて、お楽しみを、

蘇杭  
元気に新年

平成五年 元旦

新おの  
おとびと  
しげます  
本年もなにぞよろしくお願いいたします



バ  
バ  
ラ

謹  
賀  
新  
春

四柱推命講座(一)を上梓しました。  
今年も七赤金星中宮の年です。  
経済金融関係など金運に大まな  
ゆきやうとわける年となるでしょう

癸酉 元旦

〒181 三鷹市上連雀九ノ十八ノ四  
棋 玉 淑

迎春

1993年

昨年中は、私どものグループ活動にご支援を  
いただきありがとうございました。  
今年もご指導をよろしくお願い申し上げます。

バトナムの女性グループ  
よりネアワーク創り  
に力をそそぎたいと  
願っております。  
ご協力とよろしく  
お願い申し上げます。  
高橋ますみ

High Bridge Academy  
高橋学習センター

〒459 名古屋市緑区大高町伊賀殿107  
TEL (052) 622-4926 FAX (052) 624-6950

ウイン女性企画

〒460 名古屋市中区栄3-28-2  
TEL (052) 251-9064 FAX (052) 261-8778

おめでとうございます  
本年におめでとうを言える年になり  
し、そう言う私でありたいと思っ  
ております。  
向もなく一年間のモラトリウム期(?)充  
電(?)の季節が終り稼働を食べつ  
やうなやうと頑張ることになり取組んで  
いきます。いよいよ心算です。  
おめでとうに  
池谷まゆみ



## 謹賀新年

旧年中賜りましたご厚情に深謝いたしますと共に本年もなお一層のご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

平成5年 元旦

〒189 東京都東村山市美住町1-2-23

税理士

外山 静子

電話 0423-93-5422

明けまして

おめでとうございます

今を喜べ 明日を創るため

皆様の声を生かすよう努めます

本年もどうぞよろしくお願いいたします

皆様の御健康と御発展をお祈り申し上げます

一九九三年元旦

平劇 中野区本町六十六ー六メゾンK201

外口 玉子



1993.1.1

あけまして  
おめでとう  
ございます

激動の92年も過ぎ、今年も何変わることもなく、社会は不快な問題を引きずりながら新しい年を迎えました。

身体の中を駆け巡るエネルギーや思いを出し切れない毎日ですが、私流のケセラセラで何とかやっています。

本年もどうぞよろしく。

婦人民主クラブ  
わたしの情報紙 ふえみん

大森 英子



〒591 堺市東区春山町3-104-18-201 TEL 0722-51-5569 堀光分号



92年は「地球サミット」に向けて明け、リオまでは生態系を守る「生物多様性条約」に取り組み、6月以降は国内に目を転じ、ブナ林やクロウサギの心配をしながら年の瀬を迎えました。

もう一つ心配なのは「学校に行きたくない」という子どもが増えていること、心痛みます。だから、豊かで多様な自然と文化、平和で自由な社会をつくるために私は働かなければ、と心に決めております。

精一杯、私を使っていたいだきたい。また、それが可能になるよう、支えていただきたいと願っております。

1993年1月

〒113 東京都文京区本郷5-29-13-1003

堂本 暁子

(公選法により、報告で年賀状にかえさせていただきます)

明けまして、おめでとうございます。  
お元気で良い年をお迎えのことと思います。旧年中は、何かとお世話になりました。ありがとうございます。

昨年は、「朝日ジャーナル」の休刊という思いがけないドラマを体験し、私にとっては大変劇的な年になりました。休刊に納得できず、部員と共に断固抵抗したり、上層部と激論をたたかわしたり、消耗もしましたけれど、学生気分に戻ったような妙な元気が出て、面白い数カ月でした。ただ残念ながら力及ばず、「ジャーナル」を応援していただく方々には、本当に申しわけなく思っております。

ところで、私こそ、昨年七月末で「朝日ジャーナル」編集長としての責務を終え、八月から朝日新聞編集委員として仕事をしております。また、「朝日ジャーナル」が二年にわたり実施してまいりました「企業社会貢献度調査」につきましては、朝日新聞文化財団のなかに企業社会貢献度調査委員会を設け、今後も続けていくことになり、これまでのかかわりもあって、当分私が委員長を務めることになりました。以上、もっと早くご報告、ご挨拶申し上げるべきところ、今日になりましたことをお許しください。

どうぞ本年もよろしくお願い申し上げます。

一九九三年 元旦

下村 満子

## 新年あけまして

おめでとうございます。

今年もお元気で愉快に

おすごしください。

一九九三年 元旦



田 嶋 陽 子

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷一丁目

三一二三三三〇五

あけましておめでとう

あけまして おめでとうございます

1993・初春

小林 カツ代 〒167 東京都杉並区西荻北2-27-3  
「小林カツ代キッチンスタジオ」 西荻窪オリエントコート302  
TEL 03・3395・9083  
スタッフ一同 FAX 03・3395・1228

本年は宜しくお原稿をいただきます。



## 頌 春

世情騒然、恐ろしいようなタノシミなような年になりました。  
巨悪の雲を吹き払ってタノシイ年にしたいもの、と願っています。  
昨年の私どもの成人式には数々のお心づかいをありがとうございました。こまでお育てくださった皆様は心から感謝申し上げます。今年も、若さ、で行動します。  
どうぞお導きを……。

一九九三年 正月

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六

あ こ ら

Best wishes for  
a bilingual  
(and feminist)  
New Year



from



Agora English  
class

毎週月曜日、6:45pmから  
始まります。気軽に立ち  
寄り下さい。担当 桑原



あけまして  
おめでとうございます

アジアとの連帯を深め、世界の平和を願い  
今年もネットワークをさらにひろげていき  
ましょう！

1993年元旦



婦人民主クラブ  
ふえみん、婦人民主新聞  
〒150 東京都渋谷区神宮前3-31-18  
TEL. 03 (3402) 3244・3238  
FAX. 03 (3401) 3453

ありがとうございます

新春の賀詞を申し上げ、一層の御清祥を祈り  
上げます。

お蔭様で私どもも29歳、社会人として元気あ  
ふれる年代になりました。不況の荒波を乗り  
切る体力をはぐくんでくださいましたことを  
感謝申し上げております。

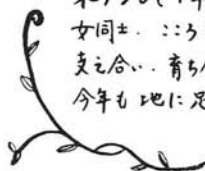
今年も数々のお導きを賜りますようお願い上  
げます。

1993年 元旦

創造力 BOC 銀行  
〒160 東京都新宿区新宿1-9-6  
☎03-3354-3941 FAX 03-3354-9014

明けまして  
おめでとうございます。

オープンして1年4ヶ月たちました。  
女同士、ころとからだについて学び、  
支え合い、育ち合う場をめざします。  
今年も地に足つけてやっています。



1993年1月

ウイメンズセンター岡山(準備会)

〒703 岡山市山崎148-25

TEL 086-274-5059

オープン日時 水요일 10~16  
金요일 10~12





新年おめでとうございます

平和で健康な一年であります

ようお祈りいたします

一九九三年 新春

井護士 井田 邦弘

井護士 井田 恵子

三十周年へ向け今年も賑やかに  
楽しく大いに行動なさい  
下さい  
井田 恵子

すまい 〒一七七

東京都健康局下石神井一ノ九ノ二〇

でんわ 〇三―三九九六―四四六九

FAX 〇三―三九九五―三五八八

おふいす 〒一〇〇

東京都千代田区有楽町一ノ二ノ十一

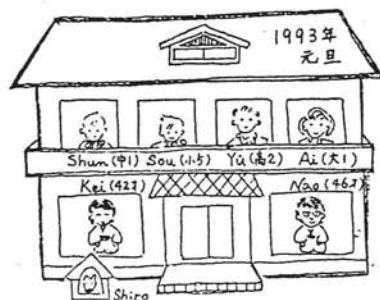
有楽ビル四階 井田法律事務所

でんわ 〇三―三五〇一―四〇五八―九

FAX 〇三―三五〇四―二九七六



明けまして おめでとうございます。



昨夏  
転居しました。

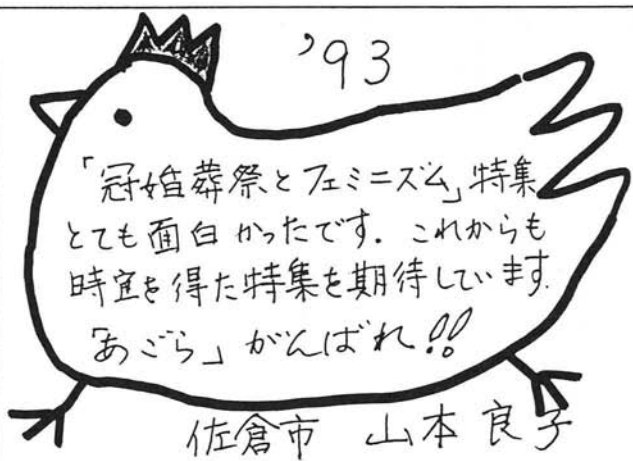
〒703

岡山市湊  
396-3

山本尚文  
市場庵子

(086)  
277-7522

特集のしめしにしています。大変でしゅうか、かんがえて出し送ってください。



あけまして おめでとう ごおめでとう。

昨年は、「あごう沖縄」編集(?)1月号  
"沖縄から発信"と発行でき喜んで  
おります。発行の際は事務局の皆様  
に御礼申し上げます。  
組織としては余り動いていませんが、

本屋さんの回り、図書館に置いていただき、  
組合の大会等で販促したいにあごうと  
1人でも多くの人が読んでいただくことを願っ  
ています。

あごうと関係する  
ことで問題意識  
を持つ習慣ができて  
います。今年も全国の  
皆様ヨロシネ!  
あごう沖縄

伊良部 裕子



「漁民船」・山崎信志 画

新春

1993

昨年の中お世話になりました。  
あごう20周年。女による女のためのひと  
の道。ひたすらありかとう。おつたれさま  
と申す。セクシャルハラスメント裁判勝利の二門異を待てました。



あけまして  
おめでとう  
ごめんなさい  
今年もどうぞよろしくお願いいたします。

継続は力なり  
ゆたかりマイペースで17年目  
今年もどうぞよろしく

今「イブの悲しい顔」を読ん  
でいます。いたいたし・いたまは  
のまじった戸惑いの中での怒りを  
禁じえません。

単にアブの肉體ではない  
根っこが見えてくる気がします。

学ばば学ぶほど、悲しみも増  
えちゃうのですが、心を通し抜け  
なくは「自分の生きたい道」は  
通じたい。死がして、勉強の  
楽さは捨てられません。

大負いながら疲れている自分を責  
めたい。今年は

"Full of Pleasure, not Pressure"  
どゆきたいです。

1993 元旦くあごう松山

あけましておめでとーございます

新しい年を迎え、皆様新たな一年の夢をえがいておられること存じます。

今年は久しぶりに「座談会」の「とんとん」にしてみました。お正月には少し重いテーマかもしれませんが、今年はまだ一歩先へ踏み出してみようと抱負を抱いておられる方には共感をしていただけるかなと思います。

昨年事には法務大臣の諮問機関である法制審議会から結婚・離婚について久しぶりに大改正となるような提案が示されました。

夫婦や親子についての裁判のありようも大きく変わってゆくことと思います。中には戸惑いを感じる方もおられるかもしれませんが、そんな時こそ前向きに生きようとする女性（男性も）を励まし続けられる事務所でありたいと思っています。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

婦人協同法律事務所  
所員一同

A HAPPY NEW YEAR 1993



ヤマセシのペア（赤旗カレンダーより）

長橋三男

## 賀正

平成五年元旦

### 下 光 軍 二

今年は、なんといっても第一の課題は、政治改革でしょうが、司法改革も劣らず重大な課題です。裁判離れ、弁護士離れの風潮は久しいが、民主国家として、法治国家としての根幹であり、安定した平和で希望ある生活の基盤の問題だからです。

国民の番犬である弁護士は、迅速で金のかからない、役に立つ裁判でしかも適正な結論の得られるものに改善しようと、やっきになって年に数回、千人ものものが集って討議しています。

しかし、一般の関心は今一つと思われまふ。去る四年十一月の福岡におけるシンポジウムも、千人以上の

弁護士が全国から集って、ムンムンする程の熱気で議論したのですが、一般には伝わっていないとは思えない反応です。一地方の問題で、弁護士のさんのお祭り騒ぎのように、受取られているとは思えません。

政治改革にしても、司法改革にしても、直接これらの業務に携わっている者たちに、その改革は委せておくべきではないと思われまふ。それは、金丸事件において、政治家自身の作った規制を見ても、また司法改革においても、従来何十回となく訴訟促進案が作られ、実行を試みられたのですが、いずれも失敗しているのは、担当者自身の行動を規制し、自分たちの尻を引っぱたいて精励するような仕組ですから、結局でき上ったものは背抜きになっているからだと思います。

そこで、改革案を検討するのはど

うしても部外者からの検討が重要です。一般国民の関心と問題解決への参画なくしては、成功しないと思われる次第で、そのもり上りを喚起することが、今年のもっとも大きな我々のつとめではないかと思ひます。

終りに、私も相変らず健康で、予防医学を最大限に掛け、弁護士としての責務を果すべく頑張るつもりです。ので、宜しく御指導下さい。

事務所 〒151

東京都渋谷区代々木二丁目二〇―二

美和プラザ新宿四〇五

電話(〇三)三三七九―二〇〇(代)

FAX(〇三)三三七九―七八二八

自宅 〒169

東京都新宿区北新宿一丁目三〇―二八

電話(〇三)三三六―一三二四六



金が信念

V・S

飢餓辛急



一九九三

豊かなお正月をすべての人々へ・・・  
豊かで優雅なお正月を誰でもが迎えられてよい筈です。その為にも、

- ① 真に平気で差別のない自由な社会である事。  
・非武装中立の日本を。(脱原発・非武装・不戦・非核・護憲『改』憲も)・反安保・反基地)  
・良心の囚人の釈放、全ての政治囚に公正で速やかな裁判、全ての囚人への「誘問・死刑」の廃止を!  
・反アパルトヘイト、指紋押捺の廃止、反女男差別、反部落差別、反障害者差別。(いざんげよ天皇制)

- ② 搾取がない社会である事。  
・むだに汗して働く者が主人公である社会を。  
・ゴミ・エネルギー・資源を考えたら、計画経済も賢が、とりあえずの最低条件です。そんな社会を目指して着実に学び、そして今の社会・生活のあり方を見直し、実践行動する一年にします。  
スィング グローバル(地球規模で考え)  
タクト ローカル(足元で実践) に挑戦。

#### ★ 今「平成」結新の時

元号は使いたくないし、更には大前研一呼びかけの「平成結新の会」とネーミングがダブルののです。坂本竜馬らが、新しい社会を志して命をかけた幕末と同じような激動の社会を生きている僕達は何を今なすべきなのだろう。

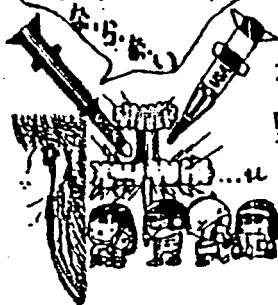
戦後40年近い自民党政権も佐川に象徴されるごとく、金権腐敗が表に出て揺らいでいる。だが、取って代わる受け皿となるべき社会党はもっと危機的状況である。現実主義の名の下に、社会党の原則が投げ捨てられつつある。(安保、自衛隊、原発の容認)。そこで、労研センター等の呼びかけて「平和運動と地域共栄の前進をめざす全国連絡会」を組織し、「護憲」の旗を「守る」結集軸となります。

#### ★ 足元で何をやめるのか。

去年結成した「人間ばんざい文芸会」で、①ミニコミ紙の発行 ②演劇の主催 ③人間ばんざい祭りの実施 を計画しています。

当面は、2月末の公演成功にむけて事務局として力をつけます。

この子らのために  
この地球を灰色に  
して未来へ渡しては



日本の国歌は「君が代」でなし  
ここで提案 国旗は「日の丸」でなし  
をシンボルに。  
山形県尾花沢市新町3  
菅野貞治



澄子

レポート

〈ミニ通信〉

◆皆さまにはお健やかな日々をお過ごしのことと存じます。

◆私は昨年、予算、環境、労働の委員会で働かせていただきました。予算委では、いまままで放置してきた戦争の加害責任、とくに慰安婦問題をとりあげ、政府に謝罪と補償を要求。また韓国、北朝鮮、中国、台湾、香港、フィリピン

の被害者の実状を調査してきました。

◆道義なき日本に対するアジアの目は厳しく、今年は国連人権委員会でとりあげられます。自らの過ちを自らの手で解決するために、私は国会で謝罪決議と戦後補償調査委員会設置のために努力します。

◆森林の環境保全、そして良



質な水資源確保と環境基本法・環境アセスメントづくりが重点です。

◆さらに労働時間の短縮、介護労働者の福祉、短期間就労労働者の社会保険加入を獲得。今年はパート労働法と労働基準法改正が山を迎えます。

◆コメの自由化に反対、所得減税、ODAの見直し、そして保育所や子育て支援政策の拡充、年金など女性政策へのテコ入れ。

◆しかし国会は市民社会とは異質なところ。非民主的で形式的な官僚主義と、数の論理の横行に悩まされています。

◆「蟻の一穴」と危惧した自衛隊の海外派兵は、あいつく国連のシナリオの変質で重武装の緊急展開部隊導入、憲法九条が危くなってきました。

◆力ネ、右翼、暴力団とからんだ政治権力を「普通人のモラル」にと、懸命に努力しています。政治改革の最大の力は国民の世論です。

◆どうぞ、今後もかぎりないご支援をおねがいいたします。

参議院議員

清水 澄子

おかやま女性  
フェスティバル

2月7日(日)

ミニドラマ「女たちの今」

女と健康シンポジウム

「私のからだは私のもの」

コーディネーター

ヤンソン柳沢由美子

シンポジスト

赤松彰子・金重恵美子

角田由起子・村尾旬子

場所/市民会館(小橋町)

参加費/500円

・「翔びたとう風をつかんで」

おんなたちの祭り'93—国際女性デー—

3月5日(金)PM6:30

楽しくやろうぜ前夜祭!

歌と演奏・沖縄芸能パフォーマンス

澤登 翠の活弁シネマ

3月6日(土)AM10:00開場

グループどくだみ構成劇

シンポジウム「21世紀にむけて女たちは」

3時から女たちのパレード

場所/渋谷山手教会

チケット2日通し2000円当日2500円

連絡/婦人民主クラブ 03(3402)3238

日本婦人会議 03(3816)1862

2月13日(土)前夜祭/14日(日)メイン・イベント

PM10:30~基調講演/講師 駒尺喜美

「自分らしく生きる」—女(ひと)と男(ひと)の曼陀羅図—

PM12:00~ファッションショー「老いても美しく」

PM13:00~「これでいいのか女(ひと)と男(ひと)」

コーディネーター/上野千鶴子

シンポジスト/春日キスヨ・野田 泰洋

福島 瑞穂・ハツ塚 実

場所/市民会館(丸の内)

参加費/午後の部のみ500円・昼食付

主催/おかやま女性フェスティバル実行委員会・共催/岡山市

問い合わせ・申込み/岡山市女性児童課086-225-4211

ウイメンズセンター岡山(準備会)086-274-0590



●姉、中野節子に寄せて

秋風に金木犀の香が漂っております。

過日はご無理なお願ひをお聞き入れ下さり、心暖まる文を姉のためにお送り下さいましてありがとうございます。突然の死に、残された者たちもただ狼狽し、どう現実を受け止めていいのやら、おろおろとしておりましたが、皆様から寄せていただいた原稿の整理を進めておりますうちに、故人の求めていた想いが甦るようで、新たな悲しみでもとせるような日々でもあります。ご協力いただいた感謝の念は改めて遺稿・追悼集の中に書かせていただくつもりです。

姉が〈へあごら東海〉に参加させていただいておりました頃、本人はまだ、悶々としながらも、「主婦」の座を徹底する（何事においてもこういうやり方が性分でしたので）ことにまい進しておりまして、「女性解放」などという言葉を吐く私など（当時はまだ「女性学」や「フェミニズム」の言葉が一般化しておらず、過激なスローガンばかりが飛

び交っていたせいもありましたが）軽蔑の言葉でしか対話をしてもらえぬ姉の存在でした。その後、商社マンの夫の海外転勤に同行することを拒んだ私は、いろいろあって離婚という形に進みましたが、その時にも、姉からは厳しい言葉を一言ももらったきりで、女としての想いを語り合える関係はその後何年も閉ざされた姉妹でありました。何をしても姉にはかなわない、あの「徹底した行動」でしか真実を認めない厳しさ（自分に対しても）の理論の前には、私などいつも「いい加減で軽率な女」として屈伏させられるだけであつたのです。

その後、私は産休補助教員をしながら子連れでいろいろな集会や運動に出、正規の教員という足場の保証を求めて、二人の子を連れ仙台にまで来てしまいました。実家にも姉にも、ほとんど相談や説明などせず生きていたので「自分勝手な妹」という肩書をそのまま受け入れ、姉とはただ季節の便り程度のやりとりであつたのです。

そのうち、四年ほど前から、姉は、娘（中二であつた長女）のことで悩んでいるという便りをよこし、難しい中学



生相手の私がどのようにやっているのかと問うてきたのです。その頃から、私たちはやっと腹を割ってうちあけ話ができる姉妹となり、教育の問題、婦人問題、障害者や老人の問題等、とりとめもなく深夜何時間も長距離電話で話していました。

私の「いい加減さ」や「軽率」な部分を、姉は「羨ましい」とさえ言うようになり、その変貌の方向にうろたえてしまいました。が、姉自身いろいろな形で女性学を学び、広く活躍されている方々との出会いで、大きく価値観を変えていた数年であつたようです。しかし、基本の部分は、恐ろしく几帳面で徹底主義を捨てきれぬ姉のこと、本人の中では、生き方を変え、目指す方向をはっきり見つけるほどに、自らの足元とのギャップに、どれほど悩み、苦しんでいたか、身につまされる想いです。

女性たちが、目からウロコが落ちるように目覚めてゆく時、頭の中の理論と現実とのギャップが大きくなること、やりきれなさは、どの人も同じなのに。かつて歴史の中でそこでもがいて生きた女たちはいっぱいいるのに……。姉は抱えきれぬほどの重さをひとり黙々と抱え込み、立ち上がる糸口はすでにつかめるといふ直前であつた時に、あの

ような不慮の事故を招くことになってしまいました。果たせなかった自分の想いを、いっぱい娘たちに託し、それが叶って長女の方はすでに女性としてひとつひとつの夢を果たせるだけの力を身につけるほどにまで成長してありました。

それなのに、その娘を連れて逝くなんて……！

某自治体主催の「女性学」の講師を引き受けるようにと高橋さまから強く依頼されていた件を、かたくなにお断りするしかなかった、姉の胸の内を、どうぞ許してやって下さい。「もう少し、あと少したてば」また立ち上がれるという確証は心のどこかで持っていたはずなのです。

本の中には、集められた方々のひとつひとつの言葉を大事に収めさせていただくつもりではありますが、フェミニズムの部分から姉の悩んでいた部分のすべてを明らかにすることは、今回はなるべく控えるつもりでおります。極めて保守的で、特異な地域性を持つ地に生まれ育ち、今もその地に暮らす父母や多くの知人の方々を想うと、今はまだ書けません。

しかし、私はいずれ必ず書きます。母と、私たち姉妹と、私たちの娘たちの三つの時代を通してこの地の女性たちへ

の視点を。姉の無念の想いを考えると、書かずにはいられない気持ちになってくるのです。私のこのすっとんきょうな生きざまを、自叙伝にして「モノカキになったら？」と姉は冗談で私に言ったことがありました。こんなきつかけで、ひとつのものを書く決意が自分の中に生まれるとは、想像だにしておりませんでした。本当に、人生はいろいろあるものですね。

どなたに胸の内をお話するともなくおりましたのに、原稿のお礼のつもりで筆を執りますうちに、とりとめもなく書いてしましまして、失礼をお許しください。遺稿集を出すことは、つらい作業ですが、私なりに（姉と相談しながら）進めて参りますが、どうぞ今後とも何かとお力添えいただきますよう重ねてお願いいたします。

（仙台・荒井俊子）



編集後記



◆〈あこら東海〉では、何でも私たち自身の問題と受けとめ、ビジネスのみならず巾広く活動している。前回一七二号の「いのちを見守る」では、夫を手につけた女性を見守り、懲役三年、執行猶予三年（求刑、懲役四年）の判決となった。彼女は息子二人と同じ所で暮らしている。お礼状が届き、これからも何かの時には支援を、と考えている。

ところが、同じ判決が戸塚ヨットスクール事件でも適用され、子どもの人権について波紋が広がっている。また、旭ヶ丘高生射殺事件では、米国社会への銃の規制運動へと展開している。母、恵美子さんの作詞に、主婦の心を歌う「まのあけみ」フォーク歌手が作曲し、署名運動を広げるため歌っている。

まもなく名古屋発信の元氣印の女性グループを紹介する本も出版される。名古屋初の「結婚整理学セミナー」——知ってお得な離婚情報——も開催された。名古屋の女性のころんでもただでは起きないパワーを感じとって欲しい。

（吉川 富士子）

「あこら」は、ギリシャ語で「人と人との出会いひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうひろば。さくのないひろばです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、と。

一九七二年以来、資料誌「あこら」（現在の「特集」を、また一九七七年からは「月刊あこら」を発行しながら、さまざまな話し合いを重ねてきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、とどしお寄せください。全国各地の「あこら」拠点にもお出かけください。

●『月刊あこら』購読料は、月額六八〇円から九八〇円。年間購読料（前納）は七、二〇〇円です。

●一年分を前納した方は会員になります。

●会員は次のような活動に参加できます。

①北海道から沖縄まで各拠点独自の活動（例会・研究会・各種集会・月刊編集その他）への参加

②月刊「あこら」の編集

③「あこら書房」の利用と運営

④BOCの利用

⑤可能性教室（「フェミニズム英語」「自立の心理学」などの運営、その他）

●会費は月額六百元（年額七千二百円）、「月刊あこら」の購読料込み。前納制。入会金は不要。

●申し込み方法

住所氏名・連絡先電話を振込用紙に書いて

年間購読料七、二〇〇円を郵便振替・東京015264へあこらへ。

●連絡先・〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あこら ☎03-3354・3941

あこら 181号 1993年 1月10日発行

●編集 あこら東海

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 くあこら 企画会議 定価 680円(660円+税20円)

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に

たった一人のわたし

そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だけれども だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあこら

人と人の出会うひろば

へあこら

人と人の共に生きるひろば